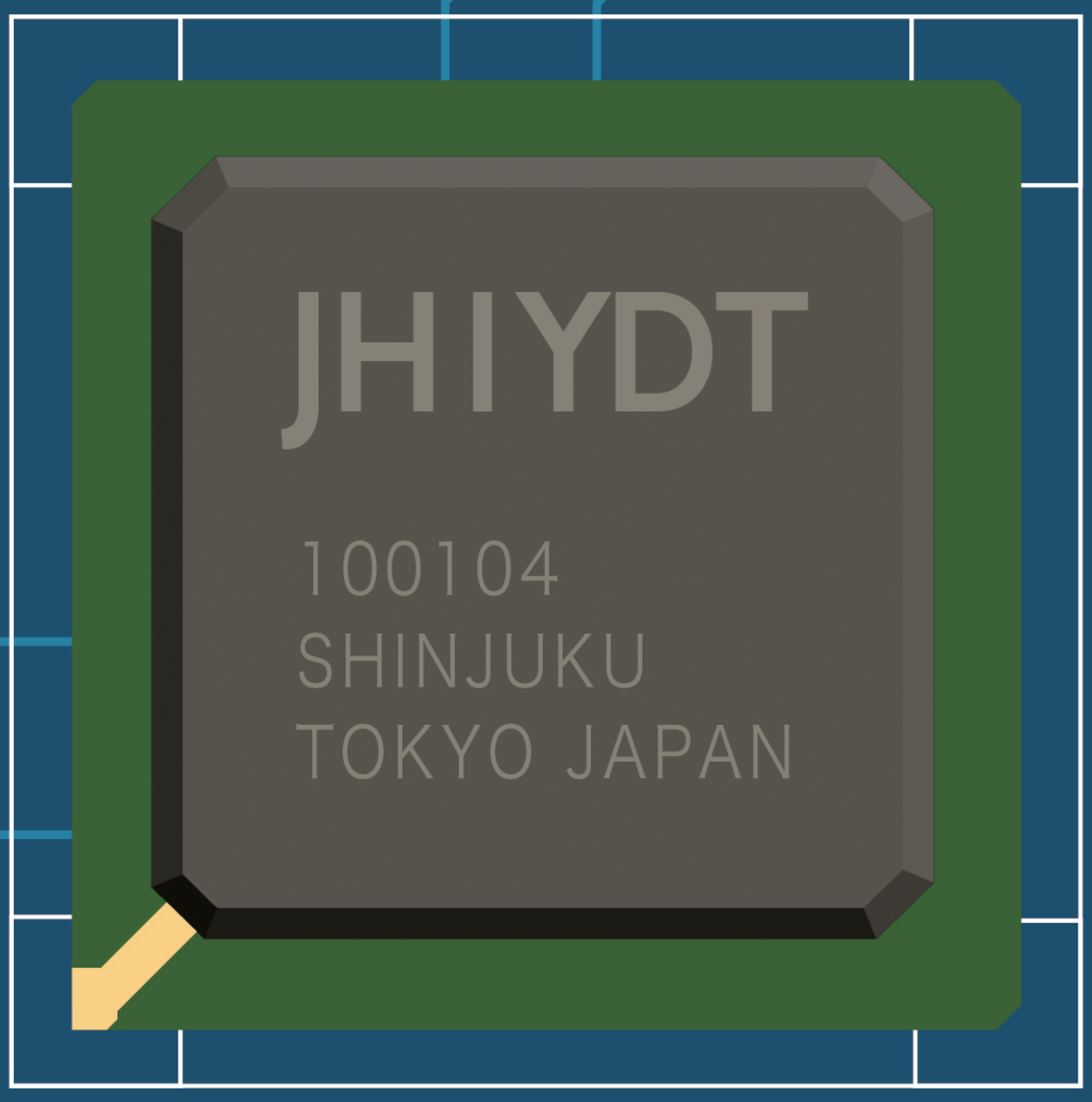
Yesterday Develops Tomorrow

2023 Autumn



2023-11-04,05

WASEDA UNIV.

70TH RIKOTEN

MADE BY JH1YDT

Yesterday Develops Tomorrow

目次

第 3 号の刊行にあたって　JK1PNV　2

特集　無線の秋、趣味の秋

ハンディ機で開局したお話　JK1IXS　4
アマチュア無線、そして YDT との出会い　JI1TMD はべけん　6
電子工作の楽しさ　つつつ　8
無趣味のすすめ　JK1QZX　9
旅行のすすめ　むねた　10
高校時代の無線部がいろいろヤバかった件　カリ　12
趣味って何だろう。　JK1QYA　14
鉄道趣味おぼえがき　JK1LVQ　16
君もできる！部誌の作り方大全　JK1LVQ　18

2023 年始動！　非常通信プロジェクト

「非常通信」を活用した防災ボランティアプロジェクト　23
防災とアマチュア無線　MAQ　25

OB 寄稿　「私の YDT 生活」

創成期の YDT　JA6JFO/JE1JNJ 右近博雄　26
OB インタビュー　JH1YDT の夜明け　JA1PRF, JA1UKS, JA6JFO/JE1JNJ　28
1970 年代の 51 号館を中心とした DX コンテスト参加の思い出　32
JH1BBT, JH1GNU, JH1SBE, JR1EYB, JF1DMQ, JA7KCL, JA0VSH
2005 年頃の JH1YDT　7M4MON　44
なんだかんだ人は集まる　JH1DWQ 染谷拓海　48

著者紹介　49
あとがき　51

第 3 号の刊行にあたって

　この会誌を手に取ってくださった皆さん、ありがとうございます。
　早稲田大学無線通信研究会幹事長の JK1PNV です。

　当会は 1970 年（と、2016 年）に設立された歴史あるアマチュア無線サークルです。現在では、早稲田大学唯一のアマチュア無線サークルでもあります。
　1970 年に誕生した「早大理工素人無線会」JH1YDT は、会員数減少により 2012 年をもって廃部となりました。しかし、2016 年に「早稲田大学無線通信研究会」としてふたたび結成され、同じ JH1YDT のコールサインで現在も活動を続けています。
　今号は、そんな当会の歴史を特集した大ボリュームの特集号です！　かつてから今に至る YDT の雰囲気だけではなく、当時の早稲田の雰囲気やアマチュア無線界の雰囲気を感じることもできる珠玉の記事が集まっていますので、ぜひ最後までお読みください。（また、過去の会誌については、当会ホームページ jh1ydt.com をご覧ください）

　本誌は、3 つの特集で構成されていますので、簡単に特集内容を紹介しておきます。
　「無線の秋・趣味の秋」特集では、会員各人の無線との出会いや、様々な趣味などについての記事を特集しています。みなさんもぜひ、これを機会に新しい趣味を見つけてみてください。（私は目下、同人誌制作が趣味です。）
　「2023 年始動！　非常通信プロジェクト」では、当会が 2023 年から始めた新プロジェクトの概要と、非常通信に詳しい OB からの記事が掲載されています。今回の理工展・早稲田祭では、実際に電波を出していただく体験もできますから、非常通信にも使うことができる「アマチュア無線」というものはどういうものなのか、ぜひ実際に体験してみてください。
　「私の YDT 生活」では、1970 年代から 2010 年代まで、総勢 12 名の OB による、当会の活動の振り返りを特集しました、半世紀前の社会情勢・大学生活・アマチュア無線の世界をぜひお楽しみください。正直なところ技術力に欠ける私には夢のまた夢な、「無線機の自作」と言ったワードも出てきて編集しながらもわくわくしました。2000 年代も、出てくるワードに時代を感じて、懐かしくなること請け合いです。

　本文に進む前に、頻出する用語の簡単な（そして適当な）解説をしておきます。以下の言葉を覚えておくと、より簡単に読み進めることが出来るでしょう。

無線局：電波を出す人／集団。アマチュア無線局には、各個人ごとの個人局と、グループでつくる社団局（クラブ局）がある。例えば、JH1YDT はクラブ局、JK1PNV は私の個人局。

コールサイン：呼出符号。無線局に割り当てられるアルファベットと数字の列で、世界中で被りはない。

開局：無線局を作ること。再開局は、一度廃止した局のコールサインを復活させて開局すること。

局免：無線局免許状。車で言うと車検証のようなもの。原則、局免を受けずに電波を出すのは、

車検のない車に乗るのと同じで違法。

従免：無線従事者免許証。車で言う免許と同じ。原則、これが無いと電波を出せない。

YDT：当会のコールサイン JH1YDT の略。早大理工素人無線会（-2012）、早稲田大学無線通信研究会（2016-）のこと。

CW：モールス通信のこと。トントンツーというやつ。電信とも。

コンテスト：一定時間（国内の場合 24 時間が多い）に交信した無線局の数を競う大会。交信した数（局数）×交信した地域数（マルチプライヤー、マルチ）で得点が計算されることが多い。

DX：遠距離のこと。本誌では、国外との交信の意味で用いられている。今はやりのデジタルトランスフォーメーションではない。

今号は編集にかかりっきりで、私の記事はないのですが、各記事の最後に私の感想を Editor's Comment という形で掲載しています。もしよろしければ、合わせてお読みください。

最後に、寄稿してくださった OB の方々、現役会員の皆さん、そして、たくさんのサポートを頂いた前編集長の JK1LVQ 氏に深く感謝いたします。

それではみなさん、52 ページに及ぶ本誌をお楽しみください！

JH1YDT 早稲田大学無線通信研究会　幹事長
Yesterday Develops Tomorrow 第 3 号　編集長
JK1PNV

ハンディ機で開局したお話

JK1IXS

はじめに

はじめまして。JK1IXS と申します。YDT には 2023 年の 4 月に入会した、インカレの学部 3 年生です。アマチュア無線自体は大学 1 年のころから始めていましたが、今春から都内のキャンパスに通うことになり活動に参加しやすくなったことや、大学生のアマチュア無線仲間を作りたいと思い入部しました。今回、部誌を発行するとのことで、私も執筆するよう JK1PNV 幹事長から命じられた（笑）ので記事を書くことになりました。このような記事を書くのは初めてなので、大変な拙稿であること、お許しください。

そろそろ、本題に入ろうと思うのですが、題名の通り、私が大学 1 年のころハンディ機で開局したお話を書こうと思います。なお、この記事の主旨はハンディ機で開局することをお勧めするものではありません。人により、アマチュア無線でやってみたいことは異なるのでそれに合わせた機材で開局すべきと考えています。

開局の経緯

まずは、ハンディ機で開局することになった経緯について述べたいと思います。私がアマチュア無線に興味を持ったきっかけは東京消防庁の署活系無線[1]を傍受したいと思ったことでした。色々調べていくうちにアマチュア無線の事も知り、広帯域受信機とハンディ機の価格が大差ないことや、コロナ禍で時間に余裕があったことも手伝い、無線従事者免許を取得しハンディ機で開局する計画を立てました。なぜ、私がハンディ機で開局したかというと理由はただ一つ、価格が安かったことです。その時はまだ、長く続く趣味になるかもわからなかったので、とりあえず最低限の出費で開局することを考えました。

無事、従事者免許を取得し、開局に至りました。私が選んだハンディ機は YAESU（STANDARD） VX-6 でした。この無線機を選んだのは署活系が受信できることは前提として、①価格が安いこと②144MHz 帯と 430MHz 帯が運用できること③ハンディ機としては最大級の 5W を出力できることでした。

開局してから

開局前、また開局してからしばらくは付属のホイップアンテナで署活系・アマチュア無線を傍受していましたがなかなかできる機会も少なく、もの足りなくなってきたので屋外にアンテナを設置することにして、自動車用のモービルホイップアンテナを設置しました。これにより驚くほど交信可能範囲が広がり、自宅のある東京都青梅市から館林市、宇都宮市、栃木市などと交信ができるようになりました。また、このころからメインは署活系よりもアマチュア無線に移っていました。

色々な楽しみ方

開局後、京都旅行の機会があり、ホテルの部屋からハンディ機で運用しました。普段は交信できない局と交信できたほか、私と同じく関東エリアから来ている局とも交信でき、話が弾みました。兵庫県に旅行した際には名物明石焼きのおすすめの店を教えてもらいました。個人的には、ネットの情報よりも、地元の人の情報が信頼できるような気がしています。こうして地元の人と話せるのも旅行先での運用の楽しみの一つでしょう。ハンディ機は 144MHz 帯、430MHz 帯が中心となるので、交信範囲は関東圏に限られ、他のエリアの方と交信する機会は持てません。しかし、このように旅行先に持参することで他のエリアの局とも交信することができます。このような機動性の高さはハンディ機の特権と言えます。

この機動性の高さを生かしたのが最近話題になっている駅前 QRV[2] です。私の場合は駅ビルの屋上から運用することが多いです。当然、周囲に配慮しながらの運用になりますが私の場合、声をかけられたような経験はありません。駅前 QRV の特長は何といってもその気軽さです。電車の待ち時間に QRV して時間をつぶせるのが気に入っています。ただ、交信に熱が入りすぎて予定の電車を逃さないように注意が必要です。（経験のある筆者からのご忠告です笑）

また、VX-6 をはじめとする多くのハンディ機は広帯域受信機としても使用できます。HF・VHF 帯の異常伝搬を引き起こすスポラディック E 層（E スポ）のスリルもハンディ機で楽しむことができました。インターネットで E スポの情報を入手し、29MHz 帯 FM をスキャンすると中国地方の局の信号が明瞭に受信できたことを覚えています。アンテナは HF 帯用のものではなく、先述したモービルホイップアンテナです。実際に交信はできなくても、交信が行われている様子を傍受するだけで面白く、HF 帯への興味がわいてきました。

さらに、広帯域受信機能を備えたハンディ機では航空無線（エアバンド）を傍受することもできます。私は詳しくないので交信の内容はよく理解できませんが、多くの交信は英語で行われているので、ネイティブな発音のフォネティックコードを聞くことができます。エアバンドの受信が趣味という人もいるほど、奥が深い世界なので、読者の方もはまってしまうかもしれません。

最後に

本稿では、ハンディ機で開局した私のよもやま話を綴ってきました。開局から三年が経過した今では、自宅からはモービル機で運用することが多いですが、移動運用や色々な無線の傍受にまだまだ活躍しています。冒頭でも述べましたが、私はハンディ機で開局することをお勧めしているわけではありません。人口の多い都市部であれば、ハンディ機で自宅からでも交信できますが、地方では HF 帯でないと交信相手がいないという話も聞いたことがあります。ただ、アマチュア無線でどんなことをやりたいか決まっておらず、とりあえず安価に開局したいという方にはお勧めできるかなと考えております。紹介したほかにもハンディ機にはまだまだ楽しみ方があるかと思います。ハンディ機をお持ちの方に少しでも参考にしていただければ幸いです。皆さんと交信できることを楽しみにしております。

脚注

1 消防無線にはいくつか種類があるが署活系は災害現場での隊員間の連絡や、比較的小規模な災害（救急現場に消防車も出場する「PA 連携」が主）で消防車と消防署の間の連絡に使用される。466MHz 帯・FM を使用しており、多くのハンディ機・モービル機・広帯域受信機で受信できる一方、その受信可能範囲は狭く、常に交信が行われているわけでもない。

2 駅前で無線運用すること。アマチュア無線専門誌である「CQ ham radio」でも連載記事が寄稿されるなど、盛り上がりを見せている。

Editor’s Comment

毎回の活動で大変お世話になっている JK1IXS 氏。同じ文系出身の無線家ということで親近感を感じていますが、普段のアクティビティではまったくかないません。
大学から無線を始められたとは思えないほどの活発さで活動しておられますので、開局される際にはぜひ IXS 氏の記事を参考にしてください。

アマチュア無線、そして YDT との出会い

JI1TMD はべけん

0. はじめに

どうも JI1TMD はべけんです。現在は先進理工学部の 4 年生で、YDT では免許上の代表者として活動をしています。この記事では、家ではほとんどアマチュア無線をやらない（できない）僕がアマチュア無線を始めたきっかけや、現在どのようにアマチュア無線を楽しんでいるのかについて紹介できればと思います。盛大な身の上話になりますが、よろしければ読んでください。

1. アマチュア無線との出会い

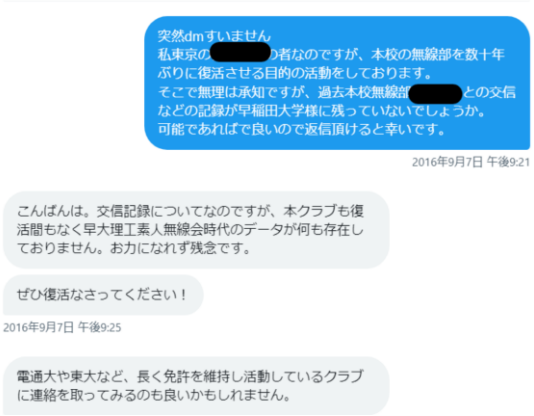
「アマチュア無線」という言葉を知ったのは、11 歳のときに小松左京が著した「復活の日」という小説を読んだときだった。その概念までは分からなかったが、遠方と通信するのかぁといったことは理解できた。ほとんど時を同じくして、祖父がアマチュア無線家であることを知り、祖父から面白さについて教えてもらい、また資格取得を勧められた。

中学受験などがあった関係で遅くなったのだが、中学 1 年の年末に 4 級のアマチュア無線技士免許を JARD（日本アマチュア無線振興協会）の養成課程で取得した。試験が免除される代わりに 2 日間カンヅメで講習を受けるのだが、ちょうど体調を崩してしまい 2 日目は熱を出しながら受講したことを覚えている（体調不良に敏感な現代社会では考えられない……）。取得後、祖父から譲り受けた V/U 帯のモービル機でコールサインを取得し、晴れて JI1TMD という名前を授かった。ちなみに、祖父は TMD を「多摩だ！」と覚えてくれた。

2. 中学・高校時代

残念ながら、自分が進学した中学・高校にはアマチュア無線部がなかった。また、自宅の条件が厳しく自宅から電波を出すこともあまりできなかった。そんな当時はたまに 430MHz FM で近所の人と交信したり、コンテストのときに祖父宅で交信したりして楽しんでいた。このころの経験からか、やはり今でも電話でのコンテスト参加は楽しい。また、3 級免許を講習会で取得し、高校 2 年の春に 2 級の従事者免許を取った。

自分と YDT との出会いは、このころに遡る。中学 3 年から高校 1 年の間、母校にアマチュア無線の同好会が作れないか模索した時期があり、そこで YDT に Twitter で昔のログを尋ねたことがファーストコンタクトであった。（筆者は中高一貫）



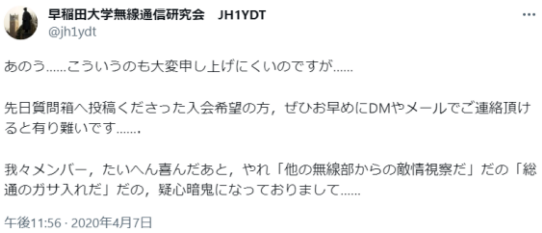
実は YDT も当時復活したばかりで、今となってはよく分かるが昔の交信ログなど残っているはずはないのだ。ただし、当時はなにも知らない時期であり、とにかくネットで見かけたアマチュア無線サークルに声をかけたのだと思う。結局、費用面などで同好会を作ることは早々に断念してしまった。

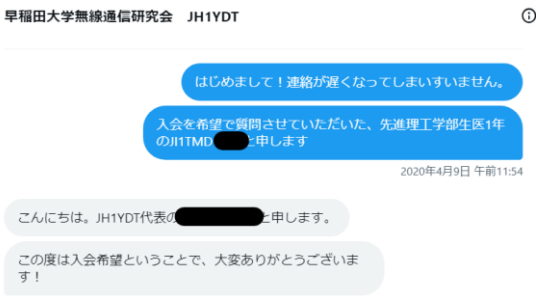
高校 2 年生だった 2018 年の冬、理工展を訪れたときに YDT のブースに行き、そこで初めて YDT の諸先輩がたにお会いした。一緒に行った高校の同期と TV 用の簡易アンテナ作成体験をして、YDT の方々と少し話した。これから先は受験勉強でアマチュア無線からは距離を置くようになったのだが、YDT のブースで同学科に在籍している先輩（JJ1OTK）に会って話を聞いたのも、現在所属している学科を希望した理由のひとつである気がする。

アマチュア無線のアクティビティは低かったものの、情報誌である CQ 誌は毎月読んでいた。そこで大学生で海外のアマチュア無線イベントに出たり、国内の大規模無線局で海外コンテストに参加したりする若者の記事を読んで「大学生でこんなアマチュア無線活動をしていてすげええ」と思いを馳せていた。それが後に大変お世話になる YDT の KHB、DWQ 両大先輩とは露にも思わず……。

3. 大学時代

早稲田に進学することが決まり、とりあえず新入生が最初に買う教科書であるマイルストーンを購入した。マイルストーンとは、早稲田のあるサークルが出している学生向けのサークル・授業紹介誌で、新入生のバイブルである。そこで YDT の紹介を改めて目にして、入会を決めた。しかし、最初からコンタクトを取るのは憚ってしまい、質問箱（当時流行っていた、匿名で Twitter ユーザーに質問できる外部ツール）で無線機類はなにを使っているのか聞いてみた。すると総通（総合通信局）の回し者か、他大学の冷やかしに間違えられそうになったので（笑）、改めてコンタクトを取り、晴れて YDT の一員になることができたのである。





それ以降の活動は 2020、2021、2022 年あたりの blog を読んでください……。コロナで大変だったが、理工展や他大学との交流、コンテストに遠征とめちゃくちゃ様々なことを体験でき、また企画することができた。

4. 最後に

最近、「なぜ早稲田に来たのか？」と聞かれたときは「早稲田のアマチュア無線サークルに入りたかったから」と半分冗談で返すことが多い。中学のときに知って、理工展でその姿を見た YDT にまさか自分が入会して、代表まで務めることになるとは思いもよらなかった。

4 年になって研究活動を始めて以来、多忙でほとんど活動に関わることができていないが、これからまだ 2 年は早稲田にいるので、なんとかこの素晴らしいサークルが長続きできるように貢献していきたい。

Editor's Comment

YDT の歴史を特集した今号に、クラブ史だけではなく各人の自分史を掲載できることは、10 年後 20 年後に参照したときの本誌の価値を非常に高めているように思います。
遠い後輩たちが 2010 年代を思うときに読んで欲しい記事でした。

電子工作の楽しさ

つつつ

電子工作は幅広く楽しめる趣味というのが魅力といえるだろう。身近なものの修理からちょっとした改造、創作まで技術に触れながら工夫次第で実現できる。また、電子部品を探しに秋葉原や、私の地元の大阪でいうと難波のでんでんタウン巡りも楽しめる。さらに、電子工作や電子工学を支えるツールや計測器類探しも楽しみである。

電子工作は回路がサーキットと呼ばれるように、電子の町を作成することともいえる。量子効果を使った電子パーツからプリント基板のエッチングなど、電子工作では電磁気、回路だけでなくさまざまな科学に触れて実感できるところが魅力である。また、何か作るにしてもアレンジすることができ自由度が高いのも電子工作の魅力である。例えば、線をつなぐにも単純に導線をつなぐか、自分でプリント基板を作成するかでも大きく楽しみが違い、専門的なことに触れることができる。

さらに最近では研究室の活動でも役立っている。超音波素子の研究室のためマイク測定装置を自作する必要があった。すべて秋葉原の電子パーツショップで集めた部品でそれをどうするかは疑問であった。しかし、実際にコンデンサでローパスフィルタを作成し、MEMS マイクをつなげてオシロスコープで計測すると実際に音をマイクで拾うことができた。かなり単純な回路であったが研究室内で電子工作の知識と経験が活かせたことはうれしく、驚きであった。

計測ツールについては格安な計測ツールも充実しつつありこれを探すのも楽しみになっている。例えば、少し前に私が買ったものでいえばポケットオシロがある。オシロスコープは標準的なものでは数万で研究用の高性能のものでは数百万するものまである。しかし、ポケットオシロは 5000 円程度で手に入り、改造やちょっとした測定も楽しめる。秋葉原や大阪難波の電子パーツショップを巡るとさまざまなガジェットが目に入り想像力を刺激する。

電子工作は電気や回路の知識を使ってパーツをつなげるだけだと思われがちだが、電気というキーワードから科学全般からガジェット探しまで幅広い楽しみ方がある。

Editor’s Comment

不器用な上に、物理も怪しい私にはなかなか手が出せない電子工作なのですが、これを機に踏み出してみようかなと思った記事でした。
皆さんもぜひ、電子工作に挑戦してみてください。

無趣味のすすめ

JK1QZX

　趣味には大抵、時間的、金銭的、体力的な余裕が必要である。個人の能力が低ければなおさらだ。それらの資源は、生活に必要なことをするだけで消耗する。それをある程度やり終えて初めて趣味に時間と体力を使うことができる。（仕事が趣味である場合や睡眠が趣味である場合などは例外である。）特に、生きているだけで金は減る。金を作るために働く必要がある。労働により、時間も体力も消耗する。
　そのような、労働などの生活に必要なことと趣味の両立ができるかは、個人の能力差による。当然、全く両立できないこともある。その場合、労働と日常生活のみをして日々を過ごすしかない。
そういう暮らし方は、趣味を持つ者にとって難しいものである。なぜなら、何かを楽しむ時間に対して、義務をこなす時間は相対的に避けたい、耐えがたいからである。
　ここで、趣味を忘れて義務のみを無感情に淡々とこなすことができれば、安寧が得られるのではないかと提案する。これが無趣味のすすめである。
　これは容易なことではないかもしれない。かといって、趣味のための資源（時間、資金、体力）は必ずしも確保できるわけではない。それらの確保ができないのに趣味について考えるのは、人によっては自縄自縛である。よって、「無趣味」を、その事態を切り抜ける一つの手段として持っておくのは有用である。

Editor’s Comment

さまざまなことに興味をもってチャレンジしている JK1QZX 氏ならではの視点で書かれた記事。
本当は、PC に関する何やら難しそうな記事を書いてくれる予定だったのだが、私が早めに締め切りを設定したために書けなかったようです。

旅行のすすめ

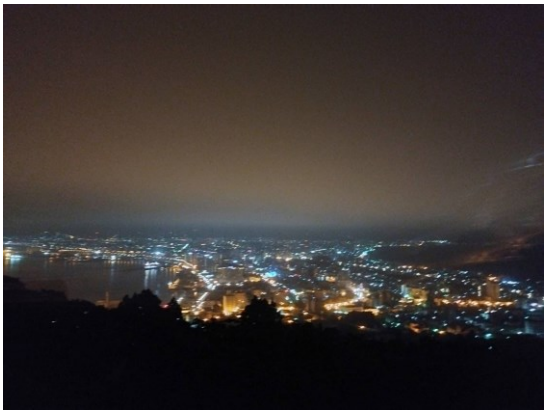
むねた

　はじめまして、コールサインの無いむねたと申します。今回が初めての部誌参加になります。
　僕のテーマは私の趣味である旅行のすすめです。

　僕が旅行を趣味にした理由としては普段訪れることのない場所に訪れることができるからというものが大きいです。これは普段の生活で行き詰ったときや飽きを感じた時に特に前面に出てくるもので、長期休み期間に入ってすぐに旅行に出かけるということを多くしていました。
　その中で学生がゆえに問題になることがよくあります。それが金銭的な問題です。やはり、学生となるとお金に余裕がなく、ハイグレードな旅行というものができません(そのような理由でコールサインがなかったりもするのですが……)。それ故に、僕は旅行をするときに極力安く済ませる傾向があります。最近ではいかに安く旅行するかという点に重点を置いており、旅行よりもそちらが目的になっています。今回はそのような経緯で生まれた貧乏旅行の小技について触れます。
　今年の夏の大学の長期休暇にも旅行に行きました。今回の旅の目的地は函館であり、函館から徐々に南下して仙台まで至って帰宅するという 5 泊 6 日旅行でした。長期休暇前に集められたお金が 5 万円だったので、それが予算になってしまいました。
　まず出てくる問題としては函館に行くのに多額の費用がかかるという問題です。これは、新幹線、飛行機だと 2 万円ほどするため、旅行全体でも大きな負担になります。そのため、東京から函館まで 7000 円で移動できる高速バスを選択しました。この高速バスは東京から青森まで高速、青森から函館までフェリーで移動するため、総移動時間 14 時間という規格外の高速バスでした。

　乗車した感想としては、高速バス区間ではほとんど寝られないものの、どうしても限界になって気絶するというのの繰り返しで、フェリー区間ではシャワーや横になれる空間があったためよく眠れるという感じでした。当日にはバイトを入れたりして高速バスで眠れるように調整したつもりだったのですが、高速バスの力には勝てませんでした。それでも、東京から函館まで僕の身体をこの値段で運んでくれた高速バスには感謝しています。
　他にも、宿泊地やご飯の問題もありました。ホテルに泊まるとお金が無くなることから、公園での野宿やネカフェのナイトパックで夜を何とか明かしていました。また、ご飯も極力節約する必要があることから、コンビニ飯や食べないという選択をすることによって節約出来ました。

このように、今回の旅行では格安移動や野宿、ネカフェを活用することによって何とか 5 泊 6 日の旅を 4.5 万円で完遂しました。旅行全体では函館山頂上や函館の朝市と有名観光地を回ることができたので満足度は高かったです。節約のために函館山は歩いて登山、朝市は 500 円丼で済ませるなど、涙ぐましい努力がありました。夜の野宿は時間が余ることがあったのでコールサインを持ったら滞在先で交信するのも楽しそうでした。



貧乏旅行において、食については我慢することが多いです。しかし、観光地や博物館など重視している点にはお金を使うというのが今必要な節約だと感じています。皆さんも是非自分を成長させられるような厳しい経済的条件をつけての旅行をしてみませんか。

Editor’s Comment

私も似たような旅行をよくしていたので、頷きながら読んでしまった記事です。
旅行はとてもおすすめです。無線×旅行、無線×カメラなど、アマチュア無線は何かと掛け合わせるのに非常に都合がいい趣味ですので、もしよければ、旅のおともに無線機を……。
普段はお話ししない地域の方との交信は、新鮮で面白いかもしれません。

高校時代の無線部がいろいろヤバかった件

カリ

こんにちは。去年から YDT に所属しているカリです。コールサインも持たずに、年に数回クラブ局で交信するだけのものです。わたしは高校からアマチュア無線というものをはじめ、今も細々と続けているわけですが、もともと高校に入るまでアマチュア無線というものを全く知りませんでした。それが今もこうして続けているのは、ひとえに高校入学したてでの強烈な印象からくるものでしょう。今回はそんな高校時代を振り返っていきたいと思います。

まず皆さんに謝らないといけないのはそもそもタイトルが正確ではないということです。というのもわたしの所属していた部は無線部ではなく、電気部だったということです。YDT がアマチュア無線のサークルである都合上こういうタイトルにしてみました。

さて、この電気部とは何なのかというと、高校時代は「電気的活動をする部」と周りには説明していました。具体的にはアマチュア無線をはじめ、動画制作、機材運用、電気工作といった様々な活動をしていました。もともとはアマチュア無線をメインに活動していたらしいのですが、だんだんと活動範囲が広くなり、このようになったと伝え聞いています。

何が言いたいのかというとこれからの話はアマチュア無線要素がほとんどないということです。ですので、あくまでわたしの経験談としてお聞きください。さて、謝罪はここまでにして、ここからはいろいろとヤバイエピソードを多少脚色しながら語ってみようかと思います。

最初に電気部を認識したのは高校初日の、入学式後に行われる文化系の部活の紹介の場でした。他の部がまっとうな PV や演技をしている中、電気部の PV はパロディーを交えたおふざけ全開のものであり、そこそこまともな中学時代をすごしたわたしにとっては衝撃でした。（これはあとで知ったことですが、わたしの入学する前年の PV では現役の校長の顔をマインクラフトで再現し、それを最後に爆破するというものを流したそうです。）PV が終わる頃には動画を食い入るように観ていたのを今でも覚えています。「高校ってこんなに自由で楽しいところなんだ」というのが最初の印象ですがまさかこの感動をこれからも味わうことになるとは、この時は夢にも思いませんでした。

さて、わたしの高校は全生徒が何らかの部活には所属しなければならず、帰宅部を選びたい生徒にとって、どこか手ごろな部活が必要でした。その先として電気部や天文部を選ぶ生徒が多かったようです。これはどちらの部も、やりたい人だけが活動する部活であったことや毎日活動がないからでしたが、同時に兼部先として選ぶ生徒も多かったようです。これにより全校生徒 1080 人の我が校でありながら、電気部では 80 人近い人数が入部している状態であり、天文部では 140 人以上入部していたこともあります。50 ぐらいの部活が存在するなかでこれは他の部に比べて圧倒的であり多種多様な人が電気部にはいました。そしてその中にはヤバイ人もいるわけで……。

ここで電気部のイカれたメンバーを紹介したいと思います。一人目は絶起寿司！　ちなみに絶起とは絶望的な起床の略で端的に言うと寝坊のことです。ですが、この先輩は一味違い、絶起したからとりあえず寿司を食べて、学校に来たという逸話を持ちます。しかも回らない寿司を！　以降これを何度も繰り返し、他の絶起した生徒に指南を頼まれたとかないとか……。二人目は魔剤大好き、麻雀日本一位の某先輩！　彼は三度の飯よりも魔剤が好きで魔剤を夕食代わりにすることもあるとかないとか……。しかし魔剤の飲みすぎで余命 4 年半を宣告されることになりました。いまも元気にやってるといいのですが……。彼の影響で魔剤と麻雀の文化が電気部に浸透していくことになり、時たま電気部室内のごみ箱をのぞくと魔剤のカンが大量に。さて人物紹介はこの辺にしておいて普段の活動の様子を少し語っていきたいと思います。

電気部は日常的な活動はあまりなく、各々が部室にきてゲームしたり麻雀したりちょっと電気的活動をするという感じでした。いかんせん麻雀の同好

会が学校にあることもあり（某先輩が電気部にも広め、電気部員も多数所属）、夜遅くまで麻雀に興じることがありました。そんな時、見回りに来る警備員や先生の目をごまかすため部室にある窓に黒のシートをかけ見回りの 8 時ぐらいにそれで乗り切ることもありました。また大会の日もそれで乗り切り、学校に無断で一泊した先輩もいるとかいないとか……。のちにそれが見つかることになるのですが、その時の言い訳が「冷房もないので夏は直射日光で暑くなるため」とのことで一回は乗り切ったそうです。（後に撤去）また、部室は外からしかカギがかけられないタイプのものであったのでカギさえしまっていれば中に誰もいないという論理が成り立つわけですが、窓だけ開けて外からカギを閉め、窓から中に侵入するということもやっていました。

ここまでいろいろと書いてきましたがもちろんいい面もあって、それは電気部が学校行事を下から支えていた面もあった点です。学校祭や他の部活の PV を作ったり前夜祭などのライブを巨大スクリーンに投影したりと、様々なことにかかわっていました。また、アマチュア無線の大会でも数に物を言わせる戦術などもあって毎回好成績をおさめています。わたしもこの部でアマチュア無線をはじめいろいろな活動をしてきましたがもともと全然関係ない、ふざけた PV からすべてがはじまったと思うと趣味とはひょんなことからできるものなんだなと感慨深いものです。

Editor’s Comment

カリ氏の出身校と私の出身校は、コンテストのジュニア部門でいつも 1 位を争う関係でした。自由でちょっと変なことができる、というのが高校無線部の面白い所だと思います。部室があればそういったたまり場を持つことができるのですが、いかんせん当会には部室がないので、それが残念でならないです。

趣味って何だろう。

JK1QYA

“趣味”というと、“持ちうる熱量をそこに最大限に発揮している大好きなこと”というイメージを私は勝手に持っている。広く浅く様々な活動をしてきた私にはこれが趣味です！と断言できるものは思いつかない。そこで、Wikipedia で“趣味”と調べてみた。意味の一つ目に、“人間が自由時間に、好んで習慣的に繰り返し行う行為、事柄やその対象のこと”とあった。趣味をこのようなものとしてとらえれば、いくつか心当たりはある。以下、それぞれについて掘り下げていくこととする。

①無線

この記事を読んでくれている人は、私より無線について詳しい人ばかりだろうと容易に想像がつくのできっかけだけ述べる。私は小さい頃から無線で何かをしている父の姿を見ていた。父親がよくわからない言葉（今思い返せばフォネティックコードだったな）を発して楽しそうにしているのを見て、何かすごいことをやっているが私には無理そうと勝手に思っていた。考えが変わったのは高校生のときだった。早大理工の学園祭に来たとき、大学生でも無線をやっている人がいることを知った。雲の上の存在だと思っていたのに急に身近に感じる出来事であった。私にもできるならやってみよう！の精神で高 3 のときに 3 アマを取った。様々な理由から B1 のときに YDT に入ることはできなかったが、B4 の 9 月に入会し今に至る。

②マンドロンチェロ

そもそもマンドリンをご存じだろうか。簡単に説明すると、イタリア発祥の弦楽器で、マンドリン、マンドラ、マンドロンチェロ等の種類がある。オーケストラでいうバイオリン、ビオラ、チェロに対応している。ネットでマンドリンと検索をかけると適当な動画が出てくるので、ぜひ皆さんに美しい音色を聞いていただきたい。私はこの音色に一目惚れならぬ一聴き惚れをした。マンドリン属のなかでも、マンドロンチェロの音色はとても深く包み込むようなものであった。また、オケの中では低音で音楽の土台となっていてとても魅力的であった。もともと弦楽器のサークルに入りたかったので、マンドロンチェロにすることを即決した。このような出会いから私はマンドロンチェロを始め、サークルを引退した今でも演奏会に呼ばれれば弾く機会を得ている。バイオリン属と違って、マンドリン属は初心者でもすぐ音を出すことができるので、もし読者の中に楽器に少しでも興味がある人がいたら始めてみることをおすすめする。

③一眼レフカメラ

一眼は最近のお出かけのお供だ。まだ始めてから一年も経っていない。バイト先の子に勧められたのがきっかけであった。運よく家に誰も使っていない一眼があったので、とりあえずやってみよう！の精神で始めた。本がたくさん出ているのでそういうものを読めば技術が上達することはわかっているのだが、まだ読んだことはない。インスタでカメラ好きの友達の写真を見たりするくらいの勉強だけだ。実際に使ってみる中で操作方法などを覚え、自己満足で写真を撮っている。こだわりは、プログラム AE を使わずにマニュアルで撮ること、そして撮った写真は編集しないこと、この二点だ。一眼を持つからにはきれいな写真を撮れる必要があると自分にプレッシャーをかけることはしない。誰に何を言われようが好きなものを好きなように撮り、その中で一枚でも素敵な写真

があればラッキーくらいの気持ちでのんびりと楽しんでいきたい。

④野球観戦

　気がついたらライオンズファンだった。幼い頃からたまにベルーナドーム（旧・西武ドーム）に行っていた記憶がある。ルールは小学生のころには大体知っていた。球場で周りの人たちに合わせて立ったり座ったりしながら応援することを楽しんでいたような気がする。高校生になって電車を使うようになり、ライオンズに触れる機会が増えていった。毎日ライオンズの何かが視界に入っていたことで、気付いたら何となく推し球団になっていた。これが単純接触効果かな？　B1 のころから毎日自ら結果を調べに行くようになり、今では毎日のようにラジオやテレビ、野球速報アプリで試合の様子を追っている。気づいたら応援グッズも増え、今期（8/20 現在）は 6 回球場に足を運んだ。ファンというにはまだ浅いかもしれないが、ライオンズのチームも選手たちも中途半端な球場も全部好きだ。本当は毎日でも球場に行きたいけれど、仕事も大学院も忙しいので時間の許す限り今後も応援していく。

　今回記事を書いていて、“好きなこと”と“趣味”の違いは何だろうと考え始めた。“趣味”の定義で”自由時間に”と絞っていることを考えれば、“好きなこと”の部分集合として“趣味”があるのかもしれない。一応広辞苑等も読んだが私の勝手な思い込みも邪魔してよくわからなかった。答えを出せずに最後まで来てしまったが、少なくとも私はこの記事を書いていて楽しいと思えた。語って楽しいと思えたということは、これらが“好きなこと”ではあることには間違いないようだ。私の拙い文章ではあるが、私の“好きなこと”が皆さんに伝わって、少しでも興味を持っていただけたらうれしいなと思う。

Editor’s Comment

趣味を伝えるというのは大変なことだな、とテーマを決めてから反省しました。
この会誌も、半ば JK1LVQ 初代編集長の趣味で始まったようなものだと思います（失礼）。それを引き継いだ私も同じようなものですが。
この会誌が、無線に限らず、自分の「好き」を人に伝えられる自由な場になっていれば嬉しいなと考えています。

鉄道趣味おぼえがき

JK1LVQ

鉄道が好きだと自覚したのはいつ頃だったろうか。幼い頃はただ乗り物として、年齢相応にはしゃいでいたような気がする。路線の名前や駅名を覚えるようなこともなく、窓の外を景色が飛んでいくのが面白い、というそれだけだった。

明確に転機として覚えているのは、小学校 4 年生の時に幼馴染と同じクラスになったことだ。彼はかなりの鉄道好きで、特に京浜急行電鉄が好きだといつも言っていた。毎日遊ぶ中で京急の話をたくさん聞き、そこで鉄道趣味という世界を知ったのだ。毎日見ている鉄道は同じように見えて実に様々な種類があり、知識によって見分けることができるという面白さもあった。

写真 1　京浜急行

また、大きな影響を受けたものとして母の存在も挙げられるだろう。母は旅行が好きで、その旅先で乗る鉄道好きでもあった。家族旅行の移動計画は基本的に陸路の公共交通機関で組まれ、飛行機やレンタカーに乗ることはなかった。東北から山陰、四国まで、いろいろなところにガタンゴトンと出かけたのだ。行き先は珍しい鉄道ありきで選ぶようになっていたので、ブルートレインのあけぼのに乗って青森へ行ったし、サンライズに乗って島根・鳥取や四国へも行った。幼い私は「鉄道で寝泊まりするなんて面白い」と思って出かけるうちに、そういう非日常の鉄道が好きになっていったのだ。

写真 2　寝台特急・サンライズ

そして私の鉄道趣味を決定づけたのが、大学生になって写真サークルに入ったことだ。写真と鉄道趣味は相性が良く、サークルには鉄道好きがたくさんいた。私より何倍もマニアックで詳しい連中とつるむうちに、自然と鉄道の話に興味が湧くようになった。私は懐古主義的なところがあるから、現代の鉄道よりもレトロな国鉄時代の鉄道に心惹かれるということも分かった。そんななかで特に好きになったのが、国鉄 185 系の特急踊り子号である。夏休みに伊豆にある祖母の家を訪ねるため、何度も乗った思い出の鉄道だ。クリーム色の車体に緑色の斜めストライプが目に涼しく、ヘッドマークも伊豆の踊り子の絵でとてもかわいらしい。車内は古いが、私にとってはそれも愛おしかった。残念なことに 2021 年 3 月に引退してしまい、定期的に見ることは叶わなくなったのだが、今もたまに臨時で走ることがある。私は最後に乗り納めをしたが、その後に臨時運行があったときは何だかんだで乗りに行ってしまうくらい好きだ。

写真 3　185 系・特急踊り子号

　とはいえ、私に鉄道の専門的知識はほとんどない。あまり形式など詳しいことを覚えることに興味が持てず、それよりも実際に乗るといった体験が好きだったからだ。また、それぞれの見た目やヘッドマーク、駅名表示などのデザインも好きで、それらを写真に収めてはニコニコしている。ある種ライトな楽しみ方と言えるかもしれないが、幼い頃の鉄道が好きという気持ちがそのまま大きくなったようで、これもなかなか楽しいものだ。

　おそらく私はこの先も鉄道が好きだろう。日常生活に溶け込んでいるものを好きになると、日々が少し面白くなる。長く続けられるいい趣味を持ったものだ。

Yakiniku Dinner Time

君もできる！部誌の作り方大全

JK1LVQ

YDT が発行する部誌も今号で 3 冊目である。今回は後輩に任せたが、創刊から 2 冊目までに関しては私が編集長を務めていた。0 から部誌を作るという作業は大変だったがなかなか楽しく、思い出深いものである。一応ノウハウのようなものも身についたので、後輩たち・そして部誌を作ってみたいと思ってもどうしていいか分からない他社団に向けて、やり方を書いてみようと思う。

今回想定する文書作成ソフトウェアは Microsoft Word である。なお、言うまでもないがここに記すのは自己流かつ YDT における場合であり、やり方は各々好きなように変えてもらって構わない。

1. 概要を決める

部誌を 0 から作る場合、決めることがたくさんある。まず決めなくてはならないのが部誌のタイトルだ。一度決めるとなかなか変えることはないので、こだわって考えたい。

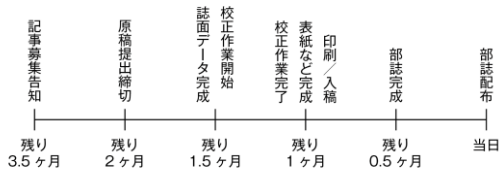
次に考えるべきは部誌のテーマだ。なぜ今部誌を発行するのか、どんなテーマを持って作るのか。例えば春に出すなら新入生に向けた内容を入れたほうがいいだろうし、学祭に合わせて出すなら外部の人に活動をアピールできるものがいいだろう。

また、余裕があれば特集を組むのも面白い。みんなに同じテーマで記事を書いてもらったり、何か大きな伝えたいことがあればそれを中心に持ってくることもできる。記事のテーマを決めることで、書くことが思いつかない人の執筆の助けにもなるだろう。

このようにして部誌の方針を決めることで、後々の制作で目指すべきところが分かりやすくなる。

2. スケジュールを立てる

部誌を作る上でまず迷うのがスケジュールの立て方だろう。以下に YDT の部誌制作スケジュールを載せるので、参考にしてもらいたい。



部誌数直線

ここでは最短日数で作る場合のスケジュールを書いているため、実際には記事募集告知を半月早めるなどして制作にもう少し余裕を持たせる方がいいだろう。

また、このスケジュールは全員に共有しておく必要があるが、ここで大事なのは原稿の本当の提出締切＝デッドラインを「絶対に伝えないこと」である。部誌を完成させる上で絶対に死守しなくてはいけない日を提出締切として伝えてしまうと、遅れて提出してきた人に対応できない。これは経験則だが、必ず締切に間に合わないという人が現れる。掲載記事がすでにたくさん確保できているのであれば未掲載として切り捨てることもできるが、1 本でも多くの記事を載せたいというのが本心だろう。であれば、デッドラインより 1 週間程度早い日にちを締切として設定し、それでも間に合わなかった人はデッドラインまで待ち、それ以降は諦めるというのが一番円満な解決方法である。もちろんその際は、最初の締切を過ぎるまではデッドラインまで 1 週間余裕があることを伝えてはならない。もし伝えてしまえば締切は「守らなくていいもの」という空気が生まれてしまい、せっかくの作戦も無に帰すだろう。あくまでも締切は死守せよという厳しさを見せつつ、デッドラインは隠しておくのが賢いやり方である。

3. ページの書式を決める

概要とスケジュールが決まれば早く記事を募集したいと思うかもしれないが、まだそれには早い。ページの書式を決める必要があるのだ。書式とはこの場合、レイアウトと言い換えてもいい。これが統

一されていないと、のちのち記事を流し込むときにとても手間取るし、なにより完成したときの見栄えがよくない。しっかり決めておこう。

以下は YDT の部誌の誌面である。これを参照しつつ、基本的な決めるべきことを紹介しようと思う。厳密には書式と違うものも含んでいるが、このタイミングで決めるべきことなのでここで触れておく。

特集

JH1YDT 早稲田大学無線通信研究会へようこそ！

JK1LVQ

部誌を手に取ってくださりありがとうございます。この記事では早稲田大学無線通信研究会を知らないという方に向けて、ちょっと紹介をしてみようと思います。

・どんなサークル？

私たち無線通信研究会は、早稲田大学で唯一「アマチュア無線」を楽しむサークルです。アマチュア無線局「JH1YDT」の運用を中心に、アマチュア無線のコンテスト出場や、西早和田キャンパスの学祭である「理工展」への出展、電子工作など、電気・科学に関連した多岐にわたる活動を行っています。前身の「理工素人無線会」（当時公認サークル）は1971 年創部。その系譜を引き継ぎ、2016 年に登録サークルとして復活しました。

現在は 12 名で活動しており、学部生、院生、インカレ生など所属は様々。理系ではない人ももちろんいます。「なんとなくかっこいいから始めてみた」という初心者からバリバリの経験者まで、メンバーがバラエティに富んでいるのも大きな特徴です。

・そもそもアマチュア無線とは？

アマチュア無線とは、「趣味としての無線通信」のことです。通信には電波を使い、音声通信はもちろん、誰でも一度は憧れるモールス信号での通信、さらには画像、映像、データを使った通信など、様々な方法で世界中と繋がることができます。自分で工夫したやり方で相手と交信できた時の楽しさは、一度体験したらやみつきに！

実は、アマチュア無線で電波を出すには「アマチュア無線技士」の国家資格が必要です。しかし、広い無線の世界には免許のいらない楽しみ方もたくさんあります。新入部員の方には、まずはそれらを通じて無線通信の面白さを知ることから始めていただき、そのあとで免許取得を目指してもらうことを考えています。資格の勉強は有資格者の部員が完全サポート！　実際に未経験で入部した部員も資格を取ることができています。

・何ができるの？

私たちが日頃行っている主な活動を紹介します。活動への参加は全て任意で、興味関心やその時の予定に合わせて決めることができます。

1. 部会
2. コンテスト
3. 学祭「理工展」への出展
4. 他大学との交流・遠征
5. 電子工作

1. 部会

月に 2 回程度、オンラインで部会を行って

6

部誌誌面

・用紙サイズ

まず手にとって読みやすいこと、かつアマチュア無線サークルの部誌だと図版なども多いためそれらがきちんと読めるサイズが求められる。B5 や A4 くらいにしておくのがいいだろう。YDT の部誌のサイズは B5 である。

・カラーモード

表紙・本文をそれぞれモノクロとカラー（CMYK）どちらで印刷するかを決める。基本的にモノクロは安く、カラーは高くなる。自分たちで印刷・製本する際は本文中にモノクロとカラーを混同させることも簡単だが、印刷所に頼む場合は面倒な場合が多い。

これまでの YDT の部誌では、表紙は印刷所に発注してカラー印刷に、本文は自分たちで輪転機を使いモノクロ印刷していた。

カラーには CMYK と RGB の 2 種類があるが、印刷所に発注する場合は CMYK でデータを作るよう求められることがほとんどである。写真などの画像は元々RGB になっていることが多く、CMYK に変換すると色味がくすむことがある。色にこだわりがある場合は気をつけよう。

・フォントサイズ

記事の読みやすさや掲載できる記事の量に大きく関わってくるのがフォントサイズである。雑誌や本の文字のサイズを参考にして最適なものを決めるといい。その際、本文、記事タイトル、見出し 1、見出し 2、……とそれぞれで数値を決めておき、部誌全体で統一することが大切だ。これがバラバラだと読みにくいし、一度決めておけば編集のときに無駄に迷うことが減る。Word などであればあらかじめスタイルという機能が用意されているので、それを活用するといいだろう。

これまでの YDT の部誌では、タイトルは 24Q、見出しは 16Q、本文は 13Q としていた。Word などではフォントサイズは Q ではなくポイント表記が一般的だが、Q からポイントへの換算は面倒なので各自にお任せする。

・ヘッダー/フッター

ヘッダー/フッターとはご存じの通り、それぞれページの上部/下部に記事タイトルやページ番号を表示する機能である。記事タイトル表示は各ページにあった方が読者に親切だろう。さらにページ番号については印刷所に発注する際に必須のことが多い上、目次をつけるときや乱丁・落丁を探すときにも役立つ。忘れずにつけるようにしよう。

・段組

悩ましいのが段組である。読者の読みやすさを最優先に、何段で組むか決めるといいだろう。YDT の部誌は横書き 2 段組としている。これは横文字や数字が文中によく出てくることと、B5 に 1 段組だと 1 行が長く読みづらいことを考慮してのものである。

・画像

画像を記事に入れるときのサイズ、比率なども決めておきたい。特に比率は記事募集時に指定しておくと後の作業が楽である。それが難しい場合は、画像の横幅だけでも編集時にそろえると統一感が出て綺麗に見える。

4. 記事を集める

ここまで決めれば、記事を集めることができる。あとは締切まで待つだけ……と思いたいが、何もせずに待っていたのでは記事の提出率は低くなる。必ず定期的にリマインドをするようにしよう。「締切を忘れてました」なんて言わせないように、1 ヶ月前、2 週間前、1 週間前、3 日前、1 日前としつこいくらいに告知することをおすすめする。

提出方法は色々考えられるが、PDF のようにテキストを取り出しにくい形式は避けよう。どんな PC でも開きやすいテキストファイル、Word ファイルなどがいいだろう。また、理系学生を中心にテキストフォーマットとしてマークダウン記法も人気があるが、部誌の原稿に用いる際には注意が必要だ。部誌の編集者は提出された原稿をコピー＆ペーストで Word などに流し込むことになるが、その際にマークダウン記法で使われる「#」や「*」がそのままテキストとして入力されることがある。これらの記号をいちいち文章内から削除するのは非常に面倒だし、ミスの元にもなる。対応ができないのであればマークダウン記法は避けた方が無難だろう。

また、記事に入れる画像は Word などに挿入して提出という形ではなく、画像単体で提出してもらうことをおすすめする。元画像があればその後の編集も容易だし、画質もそのままで受け取れるからだ。一般的に印刷物に必要な画像解像度はカラー300〜350dpi、グレースケール 600dpi なので気をつけたい。

忘れがちなのが、筆者紹介とあとがきだ。もしこれらも部誌に入れたいのであれば、合わせてこの段階で集めておこう。

5. 記事を流し込む

記事がすべて揃ったら、いよいよ流し込みである。書式が決まっているので迷うことは少ないだろう。ここで記事の順番も決まってしまうため、全体の流れやバランスを考えて適切に配置しよう。最後に目次をつけることを忘れずに。

流し込み終わったら、全体に目を通して抜け落ちやミスがないか確認しよう。この後に校正をするが、その前に見つけられるミスはなるべくつぶしておきたい。

注意しておきたいのが、全体のページ数を「4 の倍数」にすることだ。本は 1 枚の紙に 4 ページが印刷されて作られるからである。印刷所によっては 2 の倍数としている場合もあるので注意が必要だが、いずれにせよページ数が奇数ではいけない。

6. 校正・校閲する

意外と時間がかかるのが校正・校閲である。校正は誤字脱字等の表記の誤りの修正を、校閲は事実確認等の内容の誤りの修正を指す。これは厳密にやろうとするとかなり大変で、専門知識も必要だ。商業出版と同じレベルを目指す必要はないと思うが、部誌として発行する以上は出来る範囲できっちりと行いたい。

校正・校閲をする段階になったら、流し込んだデータを一旦 PDF 出力してメンバーに共有しよう。基本的に校正・校閲はその記事の執筆者以外が行うことが望ましい。書いた本人だと見つけられないミスも、第三者が客観的に読めば見つかることが多いからだ。その際、可能であれば実際に PDF を印刷した方が書き込めるので作業を進めやすい。そして校正・校閲は 1 回で終わらせず、担当者を変えて 2 回以上行うようにしよう。

校正・校閲のルールについては、ここに記述するには多すぎるので各自で調べてほしい。一つの記事内で統一したい・気をつけたいポイントとしては以下のものが挙げられる。

・約物（句読点・疑問符・括弧などの記号）のルールの統一
・表記ゆれの統一
・英数字、括弧や記号における半角・全角の統一
・口調の統一
・漢数字、英数字の統一
・時制の統一
・情報、計算式などに間違いがないか
・不快、不適切な表現がないか

7. 修正する

校正・校閲でミスが上がってきたら次は修正作業だ。その際に指摘された箇所はリスト化して管理することをおすすめする。そうしないとどこまで作業したか分からなくなってしまうし、また新たなミスを生むことになる。何ページの何行目がどう間違っていてどう修正するのか、未対応なのか対応済みなのか、しっかり記録しておこう。

修正する際には編集データをそのまま上書きするのではなく、別名保存してデータを分けてから取り掛かるようにしよう。まれに修正前のデータに戻さなくてはならないということも起こるし、いざというときのバックアップにもなる。

修正がすべて終わったら、あらためて PDF 化しメンバーに共有し、適切に修正されているか確認してもらおう。ここでも校正・校閲ができたら理想的だが、スケジュールと要相談である。

8. 表紙を作る

表紙は部誌の華である。その出来によって手に取られる数も変わってくるため、こだわって作りたいところだ。部誌のタイトルロゴなどは一度作ってしまえば毎回使いまわすこともできるので、賢く作業しよう。

ビジュアル重視でイラストや写真を使いインパクトのあるものにしてもいいし、雑誌のように特集や記事タイトルを書き入れて興味を引くのもいいだろう。世の中に出版されている本や雑誌などを参考に、より希求力のあるものを作っていきたい。

9. 印刷・製本する

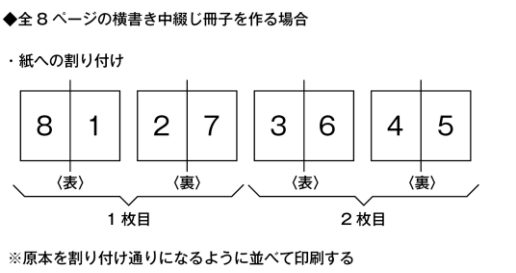
印刷・製本は、自分たちでやるか印刷会社に外注するかで作業内容が大きく変わる。ここではざっくりと紹介したい。

・自分たちでやる場合

100 部程度までであれば自分たちで印刷・製本するのもいいだろう。メリットは値段が安く済むこと、配布日直前まで作業ができることなど、デメリットとしては製本作業が人力なので手間がかかること、印刷品質に限界があることなどが挙げられる。この場合は家庭用プリンター、学校などの施設のプリンター、輪転機などを使うことになる。プリンターは印刷が綺麗だが値段が割高になりがちで、輪転機は印刷品質はプリンターに劣るものの値段を抑えることができる。

完成した原稿を印刷する際には、①PC 上で本の形に割り付けてから印刷する方法と、②原稿を 1 ページずつ実際のページサイズで印刷して原本を作り、それを割り付け通りに並べることでページを完成させてコピーする方法がある。割り付けについては、印刷する前に本のミニチュアを紙で作っておくと理解しやすいのでおすすめする。

以下の図は②の方法で全 8 ページの横書き中綴じ冊子を作る場合の割り付けであるが、本の構造はページ数が増えても基本的にこれと同じである。



部誌印刷図

YDT の部誌のサイズは B5、つまり印刷に使う紙は倍の B4 になるが、B4 で原本を印刷できるプリンターを持っているメンバーがいなかったため、②の方法をとった。

印刷が終わったら部誌の形に組んでホチキス留めをして完成である。ホチキスは中綴じ用の大きなものを使ってもいいが、MAX 社が発売している「ホッチくる」という商品が手軽で便利である。一般の文具店で安価に入手でき、綴じ枚数が 15 枚までであれば使うことができる。

・印刷会社に外注する場合

ある程度まとまった部数を発行する場合は印刷所に外注するという方法もある。メリットは高品質なものができること、製本を自分たちでやらなくていいことなど、デメリットとしては値段が高くなること、入稿する関係で締切が早くなること、印刷データ作成の際に様々なルールを守らなくてはならないことなどが挙げられる。

この場合まず気をつけなくてはいけないのが納期である。いつまでに入稿すれば確実に間に合うの

か、初めに確認しておこう。一般的に納期は「印刷所からの出荷日」を指す。完成した部誌が届く日ではないので注意が必要だ。また、土日が営業日に換算されなかったり、ミスが見つかって差し戻されることもあるので、発行日ギリギリの納期を設定することは避けたい。外注する際は特に余裕を持ったスケジュールを組もう。

印刷データの作成方法やルールは印刷所によって異なるが、多くの場合 PDF で入稿することになるだろう。各印刷所のホームページをよく読み込み、間違いのないように作成したい。

特に表紙データを紙からはみ出る（縁なし印刷）デザインにした場合、トンボ（トリムマーク）をつけなくてはいけない場合がある。これには Adobe Illustrator などの専用ソフトが必要な場合があるので、デザインの段階で気をつけておきたい。

入稿後、問題がなければあとは届くのを待つだけである。筆者はこの入稿の瞬間が楽しく、1 シーズンに 1 回程度の頻度で印刷物を入稿するようになってしまった。

10. 完成・その後

いよいよ部誌の完成である。おめでとう！

とはいえ完成してからも油断はできない。乱丁・落丁がないかを確認し、配布日に備えよう。

部誌を配り切るためには宣伝も重要である。せっかく作ったのに宣伝が不十分で余ってしまったのでは元も子もない。部誌の魅力が伝わるように積極的に宣伝していこう。決して遠慮をしてはいけない。

学祭などで配布する際には、用意した部数によっては 1 人 1 部までなど持ち帰り数制限をつけた方がいい場合もあるだろう。何時に何冊手に取られたかなど記録しておくと、次の部誌制作の際に大いに参考になる。このとき、すべて配り切ってしまうのではなく記録用に何冊か手元に残しておくことも大切である。関わってくれた方々へお礼として献本することも忘れないように。会場に来られなかった人のために、PDF データを Web に掲載するのもいいだろう。

こうして部誌が無事に発行できたら、忘れないうちに今回決めた書式などのルールをまとめておこう。次に作る際にまた一から考えるのは大変なので、面倒かもしれないが一度記録に残しておくと未来の編集長（それは後輩かもしれないし、あなたかもしれない）に感謝されるだろう。

11. おわりに

以上が私、JK1LVQ が得たノウハウのすべてである。ここまで読んだあなたには、部誌をどうやって作ればいいかイメージが湧いていることだろう（そうであってほしい）。部誌を作るということは一見すると高度な技術が必要なのではないかと感じるだろうが、それぞれの工程はそこまで難しいものではない。むしろそれらを最後までやり遂げることが一番の困難となるだろう。道のりは長いが、諦めずに着実に進めれば必ず完成させることができる。

次の部誌を作るのはあなたである。みんなで協力して、とにかくこのお祭りを楽しむことだ。いいものができるよう健闘を祈っている。

Editor’s Comment

この会誌は Word で編集しているのですが、この記事は大変参考になりました。会誌を編集した中での経験を踏まえて、Word の機能についていくつか付け加えておきます。

1. 文字を流し込む前に、「標準」「見出し　1」「著者名」などのスタイルを好みのものに変えておく。

最初に決めてしまって機械的に適用していった方が楽です。そして、後から変更するときもスタイルをいじれば該当する部分を一気に書式変更できるので、絶対にスタイルは適用しておくべきです。

作ったフォーマットを先に配って、そこに記事を入力してもらい、執筆者自身に見出しなどを適用してもらっておいた方が楽かもしれません。

2. 画像は、挿入＞画像　から挿入する。

ここから入れると、二段組の際も段の幅に合わせた状態で画像が挿入されるので、一々サイズを気にする必要が無く楽に作業できます。

3. 字下げに気を付ける。

会誌を集めると、Word の機能で字下げされている原稿と全角スペースで字下げされている原稿が混ざっていることがあります。

「非常通信」を活用した防災ボランティアプロジェクト

非常通信プロジェクト

YDT の新たな取り組みとして、アマチュア無線の防災への応用可能性を調査・研究する「非常通信プロジェクト」を 2023 年 4 月に立ち上げ、早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター（WAVOC）の公認のもと活動している。

アマチュア無線になじみ深い方々はご存じの通り、アマチュア無線には「非常通信」というものが法律で認められており、緊急事態での通信手段として期待されている。あえて「非常通信」の法的な定義を紹介すると、以下の通りである。

> 地震、台風、洪水、津波、雪害、火災、暴動その他非常の事態が発生し、又は発生するおそれがある場合において、有線通信を利用することができないか又はこれを利用することが著しく困難であるときに人命の救助、災害の救援、交通通信の確保又は秩序の維持のために行われる無線通信　－ 電波法第 52 条第 4 号

アマチュア無線は「趣味として」楽しむ通信であり、従って営利目的や業務無線の代用として使用してはならない。しかし、上述した場合は例外として「趣味」という目的から逸脱して、被害情報の伝達や安否確認などに用いることが可能になる。

私たちは普段の通信に電話回線やインターネットを使用しているが、これらは災害によって基地局や有線回線が損傷した結果不通になってしまう危険性がある。幸いにして通信インフラが安全であっても、通信が急増して輻輳してしまい、結局つながりにくくなってしまうことが容易に考えられる。この危険を回避するため、衛星電話やスペース X 社の Starlink といった通信網が発達しているが、衛星電話はサービス提供会社や所持している人の少なさ、Starlink はインターネットのため輻輳問題には対処しきれないといったデメリットがある。これに対して、日本に 35 万局以上あるアマチュア無線は通常中継局を介さない通信であり、また他の通信には使わない無線機器を使用しているため、堅牢性や独立性に秀でている。さらに、日頃からノイズや混信の中で通信を行っているため、オペレーション技術で輻輳を避けることができる。このことから、アマチュア無線は「通信の最後の砦」として災害時に活躍できる可能性を秘めている。

実際に、2011 年の東日本大震災では日常的な通信設備が失われた。しかし被災地の各地にいたアマチュア無線家が相互に情報を伝達したり、行政に情報を伝えたりして大きな貢献をしたことが知られている。同様の制度は諸外国でも定められているため、ボランティア意識の強いアメリカではデジタル通信の知見も取り入れた非常通信網が発達していて、ハリケーンや山火事などで活用された事例があるほか、災害ボランティアの中に非常通信が組み込まれている。また、2022 年からのロシア・ウクライナ戦争でも市民の安全確保のため活用されている。

日本でも各地で行政や企業、そして有志によって非常通信のためのシステムが作られ、訓練も行われている。しかし他の災害ボランティア活動と比べて一般の知名度はとても低い。私たちの活動の 1 つ目は、「非常通信」を一般の人にも周知し、その必要性を伝えることだ。

また、デジタル化も日本の非常通信の課題であると考えている。海外では PC を組み合わせたデジタル通信が広がっている一方で、日本では研究・実験段階にある。声による通話で情報を伝達すれば、伝言ゲームの要領で情報が誤ったものになる危険がある。情報（たとえば、避難所と避難者数、道路の損傷位置と概要、災害拠点病院の場所と受け入れ可能人数）をファイル形式のデータとしてやり取りすることが基本である現代で、非常通信もまたデジタル化することが急務であると考えている。私たちの 2 つ目の活動は、非常通信に活用できるデジタル技術を研究し、さらに 1 つ目の活動と組み合わせた周知を行うことだ。

防災ボランティアという性質上、他のボランティア（国際協力や福祉・教育など）と比べて「現場を体験する」ハードルは高い。そこでまずは国内外におけるこれまでの活用事例を調査し、デジタル通信

などの最新技術を研究している。これまで、技術研究の一環として、PC と無線機をつなぐインターフェースを作成し、アマチュア無線でパケット通信を行いファイルの送受信を確かめる実験を行った。本記事や 2023 年理工展・早稲田祭も周知活動の一環として参画した。

今年はじめたばかりのプロジェクトで、非常通信に詳しい方々にとっては至らないと感じる点も多々あるかもしれない。しかし、このプロジェクトを通じて、私たちとアマチュア無線家、そして一般の方々の三者が非常通信による防災可能性の意識を高めることができるように活動を進めていくため、ぜひ応援頂ければ幸いである。

YouTube **D**iscord **T**witter

今では、Twitter ではなく X になってしまった。通信は今日、欠かすことのできない重要インフラである。当会は平時の連絡には Discord、広報には主に X を使用している。

防災とアマチュア無線

MAQ

本稿は筆者が経験した「防災とアマチュア無線」について記したものである。

雑貨屋に「防災コーナー」が設営され始めたのはごくごく最近のことである。一般人の防災意識の向上がよく見られるようになったのであろうか。ただ、実際に災害が発生したことを想定すると、「情報」についての要素が強く求められる。一般人は災害時の情報についての収集は携帯ラジオなどで可能であろう。しかしながら、発信や集約については、不可能である。この不可能を可能にすることができるのは、私達、アマチュア無線家なのである。

「防災」×「アマチュア無線」のワードの掛け合わせは、阪神淡路大震災を契機にアマチュア無線家に広く知れ渡ったことは言うまでもない。震災当時は携帯電話が普及しておらず、アマチュア無線が活躍した。後に携帯電話が普及し、アマチュア無線そのものの存在が薄れていった。

その後発生した東日本大震災。携帯電話の基地局はダウンし、情報発信や収集ができなくなった。そのような中、アマチュア無線が活躍した事例がある。（詳細は、YouTube にて「防災　アマチュア無線」で検索願いたい。）現代においてもアマチュア無線が災害時における通信手段において有効であることが言える。災害時にこの通信手段の『活用』がなされることができるのであろうか。

通信手段が確立したとしても、それが機能しないと何の意味もなさない。現状、災害発生時にアマチュア無線家同士を結ぶネットワークの構築ができていない。また、情報を伝達するアマチュア無線家と、情報の伝達を必要とする市町村などの他機関との情報共有を行う形態の構築も確立していない。ネットワークの構築と情報共有の構築が両立することにより、情報の道筋が成り立つ。つまりは情報そのものを活用することができる。これができて、初めて「アマチュア無線を防災に活かすことができる」と言えるのではないのであろうか。

現在、早稲田大学無線通信研究会ではアマチュア無線を防災に活かす取り組みを実行している。（具体的取り組みについては、他の寄稿文にて紹介されているのでそちらを参考にされたい。）私の知る限り、現在研究会には多彩な知識を持った学生が在籍している。彼らによる今までにない取り組みによって、今後のアマチュア無線を防災に活かす取り組みを進められることを切に願う。

また、アマチュア無線家は、今後の彼らの活躍に注目し、必要な援助をすることが求められるであろう。その際には、どうか彼らへの惜しみない支援を願いたい。これから彼らによって救われ得る、かけがえのない命のために。

Editor’s Comment

非常通信プロジェクトの成立に多大な貢献を頂いた OB による防災に関する記事です。
アマチュア無線を防災に活用しうるということを、遠い昔の試験の記憶と共にしまい込んでいた私には、MAQ 氏の非常通信・防災にかける情熱に蒙を啓かれる思いがしたのを覚えています。

創成期の YDT

JA6JFO/JE1JNJ　右近博雄

JA1PRF 榎本、JA1UKS 西郷、JA6JFO 右近の 3 人は西早稲田キャンパスに理工学部の校舎が完成し完全移転して間もない1968年に電気工学科に入学しました。コンクリート打ちっぱなしの校舎で、当時は樹木も十分でなくどこか殺風景な感じが残っていました。

写真 1　1968 年の理工キャンパス

大学紛争も落ち着いてきた 1970 年当時、早稲田キャンパスや戸山キャンパスに早大＊＊アマチュア無線クラブ局が散在するも実体が解らない状況でした。

それではと日本で 2 番目に高い 51 号館もあるし、3 人で手分けして早稲田大学理工素人無線会設立と免許申請を行い、JH1YDT の免許を取得しました。大学内を常置場所にすると郵送される免許状も受け取ることが出来ない為、1 アマ所有の JA1PRF 榎本を局長とし彼の個人宅（東京都墨田区）を常置場所にして申請しました。顧問には当時新進気鋭で後日第 15 代総長を務められる白井克彦先生にお願いしましたが、快諾して頂き嬉しかったです。

JH1YDT 免許取得後学内 PR の結果、発足集会には 20 人以上のメンバーが集まりました。1970 年 12 月の事です。

写真 2　JH1YDT 発足集会

この教室にはワイヤレスマイク用に緑板の上にダイポールアンテナが設置してありました。

前後して 52 号館地下にぶら下げた連絡ノートをベースに JH1YDT の活動は細々と始まりました。

開局したといっても部室も無線機もアンテナもろくにないので、57 号館 2 階の南西角の陽の当たる場所で、ほとんど毎日、昼休み 5〜7 人程度が集まり、情報交換をしておりました。

コンテストは何度か参加しました。WW-CW コンテストでは 51 号館の塔屋の上にビームアンテナを揚げ、エレベーター機械室のような暗い窓のない部屋で、複数人オペレータで運用しました。夜が更け、空も静かになりますが、高い 51 号館に設置したアンテナの高さによる電波の飛びは素晴らしく、国内各局にはフェードアウトして何も聞こえないのに、JH1YDT のみが遅くまでヨーロッパやアメリカとガンガン交信していたのを鮮明に覚えています。

50Mc/s では、他エリアとも常時安定して交信できる程のロケーションです。ただ高いがゆえに都区内各局の信号も強く入感し、混信・混変調障害もありました。

日本で 2 番目に 5BAND DXCC を獲得した商学部の國友氏（JA3MXR）なども早稲田キャンパスから西早稲田キャンパスにわざわざ来られ、オペレータとして参加されました。

この頃は電子立国としても、日本が繁栄しはじめる時期です。

JA1PRF 榎本は、高校（JA1YPH）、大学（JH1YDT）、会社（JI1YKL）の無線部のすべての開設申請作業に関与。JA1UKS 西郷は、メーカー製の SSB トランシーバもまだ数少ない時代に製作が難しい SSB トランシーバなどを自作していました。JA6JFO 右近も、第二文学部の森田一義（通称タモリ exJA6CSH）氏も属していた福岡にある筑紫丘高校アマチュア無線部（JA6YGB）開局をはじめ、大学（JH1YDT）、稲門（JH1ZXL）、会社（JH3ZRM）のアマチュア無線部創立に参加しました。

高校生・大学生がアマチュア無線界の中心となっていたこの時代から、日本のアマチュア無線は大発展することになります。

JA1PRF 榎本　JA1UKS 西郷　JA6JFO/JE1JNJ 右近

当時 51 号館屋上に登って見ると、遮る高層ビルもなく、東京都内がよく見えました。
中央に見えるのは、新宿区新宿副都心に初めて建てられた超高層ビル「京王プラザホテル」です。

JA6JFO 右近は時々、FDAM-3（50Mc/s AM1W 機・IEW 井上電機製→現在の ICOM）というトランシーバを持ってきて 51 号館から無線交信を楽しんでいました。
単一乾電池が 9 個も必要な 4kg 近いトランシーバで、スタンバイと同時に数十 kHz も周波数変動がある初期の無線機でした。

Editor’s Comment

約半世紀に渡って続く当会の歴史の、源流に当たる 3 人の OM に記事を頂きました。
理工キャンパスの雰囲気は、植木が寂しい所をのぞいてあまり変わっていないなと感じますが、キャンパスから見える風景については、新宿のあまりの変わり様にただただ驚くばかりです。

OB インタビュー　JH1YDT の夜明け

インタビュイー　　JA1PRF　JA1UKS　JA6JFO/JE1JNJ
インタビュアー・編集　JK1PNV

草創期の JH1YDT 早稲田大学素人無線会について創部メンバーにお話を伺った。
必要に応じて、インタビュー内容に、編集及び括弧で注を加えた。記事「創成期の YDT」も併せてご覧いただきたい。

1960～70 年代のアマチュア無線

　当時はラジオ少年というのがいて、壊れたラジオを買ってきては直して、聞けるようにしていた。上級の資格しかなかった時代はアマチュア無線の免許持ちが少なかったが、電話級の新設（1958 年）で一気に無線家が増えた。皆、高校生の初めて局免を取るので、コールサインで年齢が分かった。

　昭和の末期は、数だけで言えばものすごい数の無線局があった。SNS がない時代はアマチュア無線くらいしか知らない初対面の人と話をするものはなかったので、変わった趣味ではあった。始める人も多かったが、少しやって辞める人も多かった。一番簡単な電話級を皆取るが、それだけだと 14MHz が出られないので国内がメインになってしまう。すると飽きるので、7MHz で CW をやり始めるが、高校生の時に CW を始めた人は DX 志向で、そういう人は長く続いている。

　秋葉原が、今の秋葉原とは違ってパーツ屋が多い時代だったので、自分で無線機を作っている人も多かった。当時は回路図が雑誌に載っていて、東京の人は秋葉原に同じ部品を買いに行って、自分で無線機を作っていた。メーカーの完成品を買うより安くできた。10 人いたら 7 人くらいは自作だったのではないか（もう少し前の、UY-807 真空管などの時代の話ではないか、との指摘が他のインタビュイーから出る）。北米の高価で高性能な無線機を購入してくる人もいた。米軍の中古 BC-779、BC-342 などが特別だった。

　東京近郊の人は秋葉原に買い出しに行けたが、地方の人は難しかった。無線をやるためには、部品を買うか、高いお金を出して無線機を買うかしかなかったので、地方でお金がない場合は無線をやろうと思ってもやれない場合も多かったのではないかと思う。

　まだメーカー品が少ない時代だったが、1970 年頃を境にメーカー品がよく出回るようになった。中学生の頃、春日無線（トリオ→現・KENWOOD）が 10W の送信機を売り出した。その後に SSB の無線機も売り出したが、大卒初任給の 2 倍だった。井上電機（現・ICOM）が発売した IC-700 は八重洲無線とは違い FET（電界効果トランジスタ）を使っていた覚えがある。この頃まではアマチュア無線の諸要素の中で自分が入り込める領域が大きく、自分でもギリギリ無線機の修理が出来た。IC-710 はデジタル VFO で、以降各社が続いた。それまでは真空管の時代だったが、ICOM は 1970 年代の終わりにはオールトランジスタになっていた。昔はテレビ 1 台あれば送受信機が作れたが、トランスレスになってしまったのでじきに無理になった。

ソ連が日本向けに日本語短波宣伝放送をしていて、沖縄からはアメリカが宣伝放送をしていて（VOA: Voice of America)、互いに聞こえないようにジャミングを出していたので、自分たちが持っているような無線機では雑音に耐えられず、夜は交信ができなかった。

ソ連と言えば、DXCC のカントリー（現・エンティティ）は随分変わっていて、当時はソ連だけでも 10 カントリーはあった。ドイツは東西に分かれていたし、アフリカは植民地が多かった。

ソ連は B 電波で、電信がピーピーではなく、ピヨピヨと鳴いていた。当時のソ連は、個人ではアマチュア無線ができずクラブ局のようにやっていた。なかばプロパガンダ用途ということがあったらしい。

“Tokyo 10W”などと言われた時代もあり、電話級しか持っていないので 10W を名乗っているが、実際は何 W だかしれないというような局がウヨウヨいた。AM で 100W 出すのは大変で、813 真空管というかなり大きな真空管と、大きな電源トランス、変調トランスといった具合だったが、が、SSB になってからは電源が小さくなって簡単になった。当時は電力事情が良くないので、それ以上だすと周辺まで電圧が落ちて、街灯が暗くなるようなことになってしまったのではないかと思う。

そもそも 10W 機が売っていなくて、100W 機を自分で改造して 10W にしろ、というような時代だった。後に JARL 認定では 100W 機を 10W 機として認めないということになって、X が付く 10W 機が出るようになった。しかし、本当の 10W でも TVI（電波障害）が出た。テレビの中間周波数が 22MHz だったから、21MHz や 7MHz が妨害を与えやすく、3kW の放送局が 1km の距離にあるのに 1W で TVI が出た。

全員が JA コールなので、1＊＊＊しか名乗らない人もいた時代だった。当時の局名録でもプリフィックスの JA の部分は省かれている。

JARL と CQ 誌が同じ場所にあったが、そのすぐ近くにハム屋があった、などと言う笑い話もある。当時の JARL ニュースは新聞ペラのようなもので、月 3 回来ていた。特に交流はなかったが、JARL の会長だった JA1AN 原昌三氏は早稲田の理工出身で、監事の JA1UE 本間忠彦氏は法学部の教授だった。

学生闘争時代の早稲田、そして開局

早稲田に入ったのは 1968 年で、その頃は学生闘争の時代だった。1968 年の終わりに有名な東大闘争があり、安田講堂を占拠して東大入試が無くなるということがあったが、それが 1 年生の終わりのことだった。早稲田にも闘争の気配は押し寄せており、2 年生の時（1969 年）の 6 月からストが始まり、理工学部はロックアウトとなった。近くでは、新宿騒乱（1968 年）もあった。理工学部は状況が落ち着くのが一番早く、2 年の 10 月頃には回復していて、1970 年にはすっかり落ち着いていた。

ロックアウトで授業が遅れたために、春休みを使って授業をやって追いつくことになった。それで春休みがなくなったものだから懲りて、理工は騒乱がなくなった。理工学部にはそういうタイプの学生が多かった。

当時は、有名な大学のクラブ局もいくつかあり、早稲田でもやってみようかということで始めた。

理工キャンパスの 52 号館にマイナーサークルがノートを様々ぶら下げていて、そこに JA6JFO 右近がノートをぶら下げ、サークルという形ではないがアマチュア無線家が情報交換をしていた。

そんな中、JA6JFO 右近が発起人で、1970 年の 9 月か 10 月に局免を申請した。部室は無いし、理工の住所にすると書類が理工学部に届いてしまうので、当時 1 アマだった JA1PRF 榎本の住所で申請した。当時は局免を申請してから届くまで 3 カ月はかかった。

1970 年 12 月に発足集会をしたが、無線と関係ない友人なども混じっている。会員は、電工、機械、通信などの学科が多かった。

当時はまだ部室がなく、コンテストの時だけキャンパスにあった 18 階建ての 51 号館に集まったりしていた。当時日本有数の高層ビルで、ロケーションが良いと思ってやってみたのだが、見通し距離が関係するのは 50MHz/144MHz くらいだったし、地上に比べると色々と聞こえすぎて雑音が多くなり、かえって受信には良くなかった。

コンテストの勝ち負けにこだわるといった形ではなく、親睦の機会と言う形だった。公認化、部室の獲得や大出力のリグなどは、少し後の JH1GNU 小林さんの代に出てきたものではないかと思う。（もう少し後の時代の部内情報媒体には、コンテストオペレーションに関する記事があり、特に DX コンテストに関する勝負の意識が高かったことがうかがえる。詳細は、JH1GNU 小林さんらの記事「1970 年代の 51 号館を中心とした DX コンテスト参加の思い出」を参照。）

JH1YDT のコールを取得してからも、相変わらずノートをぶら下げていて、アマチュア無線をやっている者がいろいろ書きつけていた。会員のほとんどは同じ理工学部の学生で、専門の授業が被っていたりしたので、部室はなかったが顔を合わせることは少なくなかった。理工学部の中でだけ物事をやっていた。

ある程度無線をやる人は個人のコールで家でも無線をやっていたから、社団局 JH1YDT のコールを使うのがメインではなく、57 号館に集まって技術交流をしていた。QSL カードも出していなかったし、JARL にも入っていなかった。

小林さんの時代は DX コンテストにも出ていたようだが、私たちはそこまではいけず、人を集めて少しずつやっていて、親睦がメインと言う形だった。私たちが免許を取った 1965 年頃は太陽黒点のサイクルが落ちている時代で、21MHz や 28MHz は苦しかった。小林さんの時代はちょうど上向いていたと思う。少し下の世代に聞くと、中高生の頃から DX で英語を話していたという話を聞くことがある。

名称は「早大理工素人無線会」とされているが、当初は名前が安定しなかったようで、クラス名簿には「アマチュア無線同好会」と書かれていたりする（本誌の他の寄稿記事・著者紹介にも「早稲田大学素人無線会」、「早稲田大学素人無線同好会」など表記の揺れがみられる）。音楽同攻会にも入っていたが、そこには川勝平太氏（静岡県知事）も居た。

学内だと、法学部にもアマチュア無線部があり、商学部の屋上にタワーの残骸があったようだ。文学部にチラシを配っていたサークルがあった気がする。早稲田キャンパスに無線局を作ると

誰かが言っていた覚えがあるが、詳細は知らない。（早稲田キャンパスにあった早稲田大学無線局 JE1YLP は、河村修平先生や先の話に出た JA1UE 本間忠彦先生のご尽力で、13 号館（1967 年の西早稲田への移転まで理工学部が入っていた）の屋上にタワーと部室を持っていたとのことなので、そういった話が変わって伝わったのだろうか。）

他大学だと、大阪電気通信大学 JY3YBF がだいぶ出ていて、東京電機大学 JA1YAQ/JA1YQN も聞いた。現在無線サークルが盛んである東京大学 JA1ZLO、電気通信大学 JA1ZGP は、当時あまり聞かなかったように記憶している。慶應義塾大学 JA1YCG は小金井に工学部校舎があったので、そちらにいたのではないかと思う。

後に、副都心線の西早稲田駅が西早稲田キャンパス横に出来たときに、理工にあった 500W の免許が下りていた部室がお召し上げになった。代わりに戸山キャンパスに部室を貰えはしたが、100W の免許しか下りず、その後メンバーが減って廃部となったと聞いている（2012 年廃部）。

大学のクラブは学部だと 4 年、修士まで行っても 6 年しか在籍しないので、一生懸命やる人が卒業してしまうとなかなか続かないものだ。

YDT OB の交流

1975 年頃に、OB を含めてミーティングをやった記憶があるが、その後はあまり覚えがない。やはり、仕事が忙しい間はなかなか大学サークルの OB としての集まりはない。アパマンになると無線へのアクティビティが下がっていくのというのもある。

定年後に集まりがあって、10 年くらい前に秋葉原でミーティングをやった。その後に OB メーリングリストができ、そうした折に YDT の復活（2016 年）を聞いたように記憶している。

Editor’s Comment

記録的な猛暑となった今年の夏ですが、夏もまだまだ暑い盛りだった 9 月に早稲田にご足労いただき、YDT 立ち上げメンバーからお話を伺いました。
無線機の自作が容易（というと語弊があるかもしれませんが）だった時代の、手作り感あふれるアマチュア無線のお話を伺い、「そうだ、私はアマチュア無線の、自分でものを作れる手作りの感覚が好きだったんだ」などと初心を思い出したりもしました。
私には決して訪れることのできない 1970 年ですが、少しの憧憬とノスタルジーとともに伺ったお話でした。

1970 年代の 51 号館を中心とした DX コンテスト参加の思い出

JH1BBT 牧大公一　JH1GNU 小林秀　JH1SBE 古川幹雄　JR1EYB 秋葉治
JF1DMQ 山村英穂　JA7KCL 武田布千雄（旧姓菅野）　JA0VSH 丸山和秀

屋上に 14MHz バンド 2 エレ Quad と、21MHz バンドの 4 エレ八木アンテナが設置されている。（出展：早稲田大学卒業記念アルバム、昭和 55 年 3 月、企画・編集　早稲田大学卒業アルバム作成委員会、早稲田大学生活協同組合）（JA7KCL 提供）

今回、JH1YDT 現幹事長の園部さんから Yesterday Develops Tomorrow 誌第 3 号への投稿のお誘いをいただきました。2023 年 7 月に JH0ZHQ（@長野県諏訪郡入笠山）で BBQ パーティー“Meating”に集まった YDT OB で相談をして、なんとか記憶を掘り起こし投稿をしようという事になりました。8 月 22 日に第 1 回の編集会議をオンラインで開催し、記憶の断片を一体どのようなテーマでまとめたものかと相談をしました。

51 号館屋上を中心にしたコンテスト活動と長野県入笠山でのコンテスト合宿には、それぞれちょっと文章にできにくいようなことも含めて、非常に多くの逸話的な思い出がありますが、今回は YDT 活動の拠点であり、かつ原点である理工学部キャンパ

スでの1970年代のコンテスト活動に絞ることにしました。

歴代の部長リストについては JH1YDT の設立をされた先輩諸氏に教えていただきました。

短期間の作業でありましたが、多くの方からの写真や資料、そして思い出の断片を集積して、若干の再構成をすることで、本稿を纏めました。内容にやや怪しい所があるようにも思いますが YDT の関係者に楽しく読んでいただければ幸いであります。

（JH1GNU）

JH1YDT の設立までのストーリー　1970 年代の部長のリスト

1970 年 9 月にクラブ局を申請、同年 11 月に JH1YDT として局免許が下りたとのお話です。JA1PRF 榎本さんが免許の代表者でしたが、初代の部長は明確でなくツー・トップ体制であったように伺っています。

【表 1】初代から 1970 年代の部長年譜

年度	部長	コール
1970	榎本　和雄 右近　博雄	JA1PRF JA6JFO
1971	右近　博雄	JA6JFO
1972	右近　博雄	JA6JFO
1973	冲中　秀夫	JH1AGH
1974	吉田　幸弘	JH1VPS
1975	三竹　和則	JR1FNR
1976	秋葉　治	JR1EYB
1977	小川　恭弘	JF1ASB
1978	土井　秀明	JE1QMV
1979	丸山　和秀	JA0VSH
1980	井村　和久	JF1EAL
1981	安藤　俊雄	JG1XLZ

当時の部内の媒体　YDT.com

1976 年くらいまでは部室が無かったので 54 号館の地下中央のパンチングメタルの壁に懸けた連絡ノートが使われていたと思いますが、1976 年 4 月 23 日付で YDT 通信が発刊されました。内容は目の前の ALL JA コンテストへの参加計画と「今や YDT は第 2 期黄金時代」という記事が掲載されていました。青焼きのコピーでした。当時は部室が無く、毎週水曜 12 時に 57 号館西側ロビーでミーティングを行っていました。そばを通行する学生から見ると怪しい集団でした。この際に青焼きのコピーを配布していたと思われます。青焼きコピー機は各メンバーの研究室に潤沢に配置されていたので、コピーには不自由しませんでした。

その後現在の 65 号館の建っている場所の北縁にバラック建ての部室群ができ、折衝に長けた JR1EYB の努力で、その 1 つを部室に確保できた経緯です。

なお青焼きのコピーとは、1970 年代まで官公庁、学校で主流だった複写方式で、半透明の紙に手書きした原稿と感光紙とを重ねて露光し、現像液を作用させるものです。

第 2 号では早速「YDT.com」に改名され、なんとその年の 7 月 7 日には 15 号が発行されています。号数が不明ですが 1977 年 9 月 28 日発行の YDT.com には、「入笠山合宿フィールドデー大成功」、CQ WW コンテスト参加作戦の記事が掲載されていました。長野県富士見町の入笠山からの運用については、51 号館からのコンテスト参加に負けないくらいの沢山のとんでもない思い出があり、別途の機会に紹介させていただけたらと思います。1977 年の CQ WW コンテストに計画していたアン

テナですが、YDT.com によると：

1.9MHz 5/8λGP、51 号館屋上から部室まで
3.5MHz 5/8λGP、51 号館屋上から 54 号館まで
7MHz 3eleYagi×2（W&EU）、51 号館屋上
14MHz 2eleQuad、51 号館屋上　木製ハシゴタワー
21MHz 2eleQuad、51 号館屋上　木製ハシゴタワー

と、かなりとてつもない計画でした。

（JH1SBE）

【表 2】発掘した YDT.com に掲載されていた内容

発行日	号数	内容の抄録
1976 年 4 月 23 日	1	ALL JA コンテスト参加計画、「今や YDT は第 2 期黄金時代」
5 月 1 日	2	YDT.com に名称変更 ALL JA コンテストの反省、「1.9MHz が想像を上回る飛び具合」
5 月 11 日	3	ALL JA コンテストの反省（その 2）
5 月 12 日	4	6m AND DOWN コンテスト作戦、500W 免許取得計画、
不明	5	サークル協加盟の提案、新人募集の反省
5 月 25 日	6	4CX350F×4 リニアの設計その 1
不明	7	WPX コンテスト結果と反省、ALL JA コンテスト結果と反省 500W 予備免許受領、落成届送出
5 月 25 日	8	4CX350F×4 リニアの設計その 2
不明	9	4CX350F×4 リニアの設計その 3
6 月 3 日	10	NF0.3dB の VHF 用プリアンプ（EME 受信に使った！）
不明	11	6m AND DOWN、フィールドデー、同コンテストへの作戦
不明	12	4CX350F×4 リニアの設計その 4
6 月 13 日	13	（フィールドデー）入笠山移動計画、現地略図
不明	14	4CX350F×4 リニアの設計その 5
7 月 7 日	15	6m AND DOWN 計画、JH1VOE 中村先輩追悼
1977 年 9 月 28 日	不明	「入笠山合宿フィールドデー大成功」、WW コンテスト作戦

51 号館とキャンパス全体を自由に使ってアンテナを建てる！

50 年も前の話です。今では考えられないと思いますが、当時は 51 号館の屋上どころか、エレベーター機械室を自由に使え、その塔屋の上にも上がることが出来たのです。当然、他の建物の屋上にも出られたので、結果として、西早稲田キャンパス全体が、同軸ケーブルが届く限りは自由に使えたのです。もちろん節度を以て、であります。

50 年も前の屋上からの風景は今の東京とは大きく異なります。51 号館は日本の高層ビル（60m 超を指す）の黎明期のビルです。当時は高層ビルのお仲間は数えるほどで、新宿副都心には京王プラザホテル、安田生命ビルなど（写真 1）、都心方面は霞が関ビルと浜松町の世界貿易センタービルという風に、本当に両手で十分に数えられるほどだったと思います。入学当初は、高田馬場駅前の BIG BOX すら無かったし、山手線車両にクーラは付いていなか

った（扇風機の強制空冷）という時代です。

写真 1　51 号館屋上からの新宿副都心の風景
1975 年 CQ WW DX（CW）コンテスト日曜日の早朝に撮影。（JR1EYB 撮影）

51 号館屋上のアンテナとして一番シンボリックだったのは、エレベーター機械室塔の上に上げた 2 エレの Quad ですが、当初は 14、21、28MHz のバンド毎に別々の同軸で給電しトライバンダーとして使用していました。その後バンド毎での同時運用をする為に、14MHz バンド専用として用いるようになりました。残念ながらこの 2 エレの Quad が 51 号館の上に格好よく立っている写真は見つけることができませんでした。コンテスト後に撮ったと思われるオペレータが Quad と一緒に写った写真がありました。

写真 2　51 号館エレベーター機械室塔屋上での集合写真
1976 年の WPX SSB コンテストの後の写真。2 エレ Quad の竹製スプレッダが写っている。損傷させてしまった風速計の支柱も左側手前に写っている（本文参照）。
左から、上段 JR1IJV、JH1BBT、中段 JH1GNU、JH1SBE、下段 JR1IMM、JH1AGH、JH1GNV、JR1LYT（JR1EYB 撮影）

このアンテナは 3 月末の CQ WW WPX コンテスト（SSB）から、4 月末の ALL JA コンテストまで上げたままにしておき、4 月の新入生の勧誘に非常に直義的な広告塔等としても機能してもらいました。

そうそうエレベーター機械室の中にコンテストシャックを設営していたのですが、この場所の電源は非常に強力で 200V、200A の電源容量があり、本当に使い放題でした。hihi

（JR1EYB）

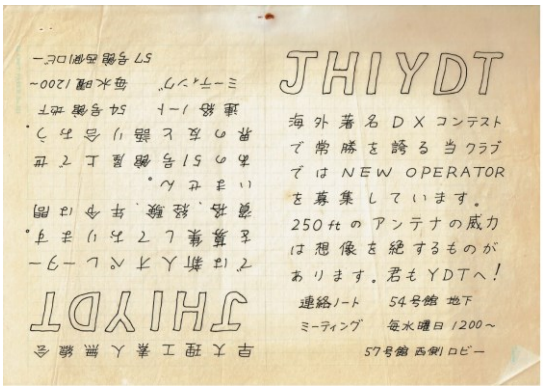


写真 3　新人オペレータ募集のチラシ
（JH1SBE 提供）

コンテストのために建てたアンテナの思い出

1.9MHz バンド 5/8λGP

1980 年 12 月に、51 号館外階段室の屋上（地上高約 80m）から 56 号館屋上への約 100m 長のエレメントを張り、56 号館屋上面に長さ 40m のラジアルを 20 本展開した 160m の 5/8λ の GP を設置して、ARRL160m コンテストに参加しました。42QSO、18Multi で 1,512 点というすばらしい結果でした。当時のバンドはまだ 1.9MHz の 5kHz のみの割り当てで、W（編注：アメリカ）に対してはスプリットでの運用でした。都心で 100m の長さのエレメントを張ると中波ラジオ局の放送波が乗ってしまい、エレメントを触ると強い感電を生じました。FT101B の背面についている受信部保護用の豆球が煌々と点灯していました。オッシロで測定すると 1MHz の強力な（200V ピーク）サイン波が見えました。TBS の戸田送信所からの電波でした。

夕食に近くのラーメン屋（えぞ菊明治通り店）へ行くと、中波ラジオから YDT の電信のクリックが聞こえて交信の状態が確認できたことをよく覚えています。

（JA0VSH）

【表 3】　1980 年 ARRL 160m（CW）コンテストの結果

参加カテゴリー	順　位（JA）	コール	得点	QSO	マルチ	オペレータ
Single OP High Power	1（1）	JA3ONB	2,646	63	21	
	3（2）	JE1SPY	484	22	11	
Multi OP Single TX High Power	2（1）	JH1YDT	1,512	42	18	JA0VSH, JE1QMV, JF1DMQ, JF1EAL, JH1GNU, JK1CQG
	4（2）	JA7YAA	324	18	9	

括弧内はカテゴリー別の順位

3.5MHz バンド 5/8λGP

1977 年の CQ WW DX の SSB/CW コンテスト向けには、51 号館外階段室の屋上（地上高約 80m）から 56 号館屋上へ約 50m の長さの斜めのエレメントを張り 5/8λ の GP を設置しました。この頃は 65 号館の北側にバラック建ての部室があり、其処に同軸を曳いて運用をしました。非常に良い飛びで、明け方の AF 方面に対してアドバンテージがあったのを覚えています。

（JH1GNU）

7MHz バンド 3 エレ ZL スペシャル

W 向けと EU 向けに固定の 3 エレを 2 面張りました。エレベータ機械室塔屋から、それぞれ屋上の端迄トラロープに固定した ZL スペシャルとディレクターとを斜めに張ったものです。屋上からは数 m しか浮いていないのですが、特に EU 方向には素晴らしい飛びで、夜半から日の出までパイルアップが途切れることがありませんでした。コンテスト後に、それなりの設備を持っている局でも YDT の相手局が聞こえていなかったとの話を聞き、大変に驚いたのをよく覚えています。

（JH1GNU）

写真 4　屋上に上げた 3 エレ ZL スペシャル
エレメントは 300Ω リボンフィーダ。フェーズライ

ンも見える。21MHz バンドの 3 エレ八木も写っている。（JR1EYB 撮影）

14MHz バンド 2 エレ Quad

アンテナロータですが、エモテータを上下さかさまにマストのてっぺんに取り付けて、Quad アンテナのブームをロータの底面の取付穴を利用して U ボルトで固定するという強引な方法を使っていました。皆さまご想像の通り、この高い場所に 20m フルサイズの Quad を上げるのはやっぱりかなり怖い作業でありました。

一度風向風速計を壊す事故を起こしました。1976 年の WPX SSB コンテストで、強風でクロスマウントの溶接が壊れ、スプレッダを含むエレメントがブームから外れはしなかったものの、傾いて風向風速計に接触し、損壊させてしまったのです。コンテスト途中に降ろし、秋葉（JR1EYB）の家に持ち込み、溶接をし直して、再度上げました。すばらしいファイトであると思いませんか。写真 2 はこのコンテストの終了後での集合写真です。併せてご覧ください。

しかしアンテナ事故はこれだけだったのは本当に運が良かったと思います。

（JR1EYB）

1975 年から 1977 年の CQ WW DX コンテスト参戦の思い出

CQ WW DX コンテスト序章

大学のクラブ局で DX コンテストに参加する醍醐味は、何といってもマルチオペレータ・マルチトランスミッター（MM）での運用である。この当時日本では個人コールでの MM 参加は認められていなかった。そのため複数の構成要員が同時に運用可能なクラブ局での参加が必須であった。

そのクラブ局の MM 運用では次の要素が必須になる。

①48 時間、複数バンド同時運用を可能とするオペレータの確保
②最低 5 バンド同時に電波を出せる無線機の確保、且つ各バンド相互干渉しない送受能力
③同時運用可能な個別のアンテナ

これらの要素を全て充足した局を準備するのは相当なやる気とパワーが必要だ。

YDT も 74 年までは MM でなく MS（SSB）で参加していた。YDT に於いても各バンドに熟練したオペレータを配置するのは困難であった。私は YDT の活動に 73 年から参加していたが、当時 YDT でも国際コンテストに参加した経験者が限られていた。

こんな環境のなか、74 年私が電工 3 年の授業中（小林注：授業が終わった後です）に出会ったのが小林（JH1GNU）であった。この出会いから、CQ WW DX コンテストに MM で参加ということになってゆく。

すでにメンバーだった三竹（JR1FNR）古川（JH1SBE）秋葉（JR1EYB）に小林も加わり DX コンテスト参加を盛り上げようという方向になったと記憶している。

CQ WW DX コンテスト参加の第一関門はコンテストでのオペレーション技術だ。国内コンテストの参加から始めて、少しずつ技術を磨いてゆくことになった。1975 年 4 月に新入部員が加わったところで、手始めに ALL JA コンテストに参加。皆でコンテスト QSO のテクニックを身に付けていった。オペレーション技術の研鑽とともに、お互いの親睦を深めたのが 1976 年から始めた夏の入笠山移動運用であり、1977 年からは本格的にフィールドデーコンテストへ参加し、ディープな移動コンテスト運用技術を習得していった。

1975 年 CQ WW DX

SSB コンテスト（1975 年 10 月 25 日 00Z から 48 時間）

リグとアンテナは以下のようであったと思う。

【表 4】　1975 年 CQ WW DX コンテスト（SSB）のアンテナとリグ

バンド	アンテナ	リグ
3.8MHz	エレベーター棟から東西に張った DP	FT101B
7MHz	ワイアー3ele×2	Drake4B line
14MHz	エレベーター棟上　2ele Quad	TS820S
21MHz	屋上面に屋根馬　3eleYAGI	TS520
28MHz	エレベーター棟上 2eleYAGI	FT101B

開始前日、夕方 7MHz の様子見をしようとワッチしたら、日本語でない局がいる。スペイン語らしいことは認識できた。その S9+30dB の信号は LU であった。決して一般の地上局での受信ではありえない Big Signal にびっくり！！！

コンテスト結果は、目標とした 100 万点には遠く及ばなかった。しかし、YDT で初めての MM 運用の実績を作ったことは大きな 1 歩であった。

CW コンテスト（1975 年 11 月 29 日 00Z から 48 時間）

21MHz のリグが DRAKE 4C Line、他は SSB 時とほぼ同様。

CW の 7MHz は EU 方面に良く飛んだ。当時は中国やロシアの放送局が我が物顔で 7MHz バンドいっぱいにのさばっていて、EU 方面との QSO は大変であった。にも拘わらず EU の信号が浮き上がって聞こえたのは経験したことのない素晴らしい出来事であった。60m 超えのビル屋上に上げた 7MHz のビームアンテナの効果は絶大であった。

28MHz はコンテスト中コンディションが悪く、全く北米はかすりもしなかった。コンテスト最終盤の月曜日の朝、ノイズばかりの 28MHz を聞いていた JH1GNU が KL7 の信号見つけたが、弱すぎるので、JR1EYB がアンテナを北米に回しに行き、回転させる為に少しアンテナをもち上げた瞬間、信号が強く浮き上がり、めでたく Zone 1 を get 出来た。その場にいた OP 達で喜びあった。

CW コンテスト得点は、黒点数最少期であったため、ハイバンドで局数が伸びず 67 万点の記録に終わった。CW の MM 運用の問題点をいろいろ抽出でき、将来への改善点が見えたことは大きな成果である。

おまけのエピソード　その 1

これはコンテストを実行するのに重要なポイントとなったエピソードである。

11 月 26 日（水）から当時国鉄の労働組合がスト権ストを実行したため、多くの学校は休校となり、我が早大もストが終了するまで、休講のお達しがでた。休日扱いとなっている理工学部構内には、学生であっても車での乗り入れが OK となった。このことはコンテストの準備にとっては大変に好都合であった。丁度牧大は卒論の真っただ中でコンテストどころではなかったが、学校が休みになったおかげで卒論実験については完全にさぼりをきめこみ、ひたすら無線機器の運搬のために自家用車で何度も学校と関係者の家とを往復した。このストが無かったらどのようにしてリグを揃えることが出来たことだろうか。

結局、スト終了までは、車を理工学部構内におけるので 28 日（金）から駐車した。12 月 1 日の月曜日の昼過ぎには 51 号館の片付けも終了し帰宅する段となった。ところが鍵が車の鍵穴に入らない。助手席ドアーの鍵も入らない。ようやく、鍵穴に何かをつめこまれたいたずらだと気が付き、冷静になってハッチバックドアの鍵穴を試すと普通に鍵が開いた。窮地を脱出出来た。車の後部から入り、なんとか運転席に着座したときには、コンテストの疲れもいっぺんに出て、本当に脱力した。

1977 年 CQ WW DX

77 年は 75、76 年と積み重ねた経験を活かし、大規模にチャレンジする目標を掲げた。その理由は、学校に残っていた JH1GNU が卒業前に MM で目いっぱいコンテストをやりたいとのことで、牧大も賛同し実施した。

コンテスト全体の作戦は、特に 3.5MHz に重点を置いて設備を充実させることを決めた。

SSB コンテスト（1977 年 10 月 29 日 00Z から 48 時間）

3.8MHz には、51 号館から 56 号館屋上に斜めに引いた、5/8λGP アンテナを作った。20m 長さのラジアルを 20 本 56 号館屋上にベタ置きした。28MHz は 2 エレから 3 エレに格上げした。

このコンテストでの一番の思い出は、コンテスト終了直前の月曜日の朝である。10 月の末ともなれば、だいぶ寒くなりかけた時だ。確か快晴の朝であった。6 時ごろに日の出を迎え 51 号館の上は目いっぱいの朝日を浴びていた。牧大が 21MHz のリグに着く、小林が 28MHz のリグに着く。21MHz のバンドは静かであった。バンドを少し聞いて、牧大は CQ コンテストの一声を発した。受信した瞬間 S メータが一気に 9 まで振れた。北米からの猛パイルアップだ。心の準備が出来ておらず焦った。それでも数分しないうちに調子に乗り、ピークで 4 局/分のスピードで捌いてゆく。北米イーストコース W1～W4＋カリブ海局のオンパレードだ。

30 分も経たないうちに今度は 28MHz の小林が北米から猛パイルアップに襲われる。2 人は凄いスピードでパイルをさばき続け、途中競争になった。すべての神経を集中し受信しコンテストナンバーを送り続ける至福の瞬間だ。それも 9 時 JST で終了した。

21MHz が 400 局、28MHz が 300 局稼いだ。コンテストの総 QSO 数が 1,862 局でその内 700 局は最後の 2 時間半で稼いだ。このような経験をするとパイルアップを浴びる快感を忘れられなくなる。目標であった交信総局数 1000 局、総得点 100 万点を達成することができた。これが JH1YDT の CQWWDX コンテストの SSB でのレコードになっている。

CW コンテスト（1977 年 11 月 26 日 00Z から 48 時間）

アンテナ・リグは SSB 時とおおよそ同じであるが 3.5MHz には Drake 4C ラインを割り当てた。7MHz の 3 エレは ZL スペシャルにディレクターを付けたものにした。また 21MHz のアンプを強化する為に、3-500Z の自作アンプを割り当てた。

このアンプをコンテスト前日の夜に 51 号館の上に持ち込み運用場所にセットした。ところがアンプの高圧電源を持って来ていないことに気が付いた。それでもプレート電源のダイオードブリッジだけは持って来ていたので、7MHz のアンプ用の電源トランスに、もう 1 つダイオードブリッジを並列に接続した。困ったのが平滑用コンデンサで、どこかにないかと騒いだら、ある学科の研究室から借用するという話が持ちあがり、バカでかいオイルコンが到着し事なきを得た。

その時使った電源トランスは二次側 2600V×1.7A の仕様で、3-500Z のアンプ 2 台を接続し同時に運用してもプレート電圧計の針が微動だにしなかったことを強烈に覚えている。

昼間は 14 と 21MHz で稼ぎ、夜は 3.5 と 7MHz で稼いだ、3.5MHz の 5/8λGP は経験したことのない局数を稼ぎ出し、7MHz の EU、中近東、AF の飛びは秀逸であった。翌朝 7MHz のオペレータの JH1AGH が興奮しながら 7MHz の交信実績を語ってくれた。なんといってもその当時 7MHz バンドの WAZ で超貴重な ST（スーダン Zone34）が、向こうからコールしてくれた話は感動的であった。

コンテスト結果では、初めて総得点数が 200 万点を越えた。JH1YDT の CQ WW DX コンテストの CW レコードを樹立。満足できる結果を残せたことは幸いだった。

おまけのエピソード　その 2

これはコンテストの後で聞いた話だが、コンテストの最中に学校の事務所に近くの住人からのクレーム電話が入った。内容は「うちの息子がアマチュア無線をやっているが、お宅の学校の無線局の電波が強すぎて無線ができないといっている、どうにかしてくれ」といった話だった。確かにその局までの距離は 2~3km しかなく JH1YDT のアンテナが目で見える距離にある。これは、たとえ 10W 出力であったとしても当時の無線機の性能では大きな感度抑圧を受け使用できなくなるだろう。都会で MM コンテストを行うと周囲の局との摩擦は多く存在すると、あらためて実感した出来事だった。

自作のアンプを初めて 7MHz で使おうとして、チューンを取り始めた時のことだった。どこかからチリチリ、パチパチ音がする。AMP のプレートチョークの表面から火花が出ているのが（自作のアンプなので）見える。プレートチョークにホール（不要な共振点）があって過熱していると想像でき、どうであれ巻き直ししなければならないことが判った。それで更にアーアーと声を出し続け、RFC を焼き切った。電源を落とし RFC を巻き直して無事に？7MHz での準備を整える事が出来た。その自作のアンプの電源（高圧トランス＋シリコンダイオードのブリッジ＋オイルコン）であるが、バラックで、且つ裸状態で足元に置かれており、高圧注意と書い

たダンボールの張り紙だけ。今考えてもぞっとする……。

複数台のトランシーバ＋アンプを使用するので、アンプ系統は 200V で使うことにしていた。無謀にも 200V を 100V のテーブルタップで引き回していた為、不注意にも？家庭で使う電気ポットを差し込んだために、一瞬で昇天。100V 仕様のトランス配線であった FL2100B も同様にして壊し、大きな損害を出してしまった。

（JH1BBT）

【表 5】CQ WW DX コンテストの参加記録（SSB）　（参加カテゴリーは全て MM）

年度	順位	得点	局数	マルチ	オペレータ
1975	4 位/JA	581,280	890	230	JH1BBT JH1GNU JH1AGH JR1BSM JH1KLA JR1EYB JR1FNR JR1FVK
1976	9 位/JA	103,600	328	112	JH1AGH JR1IMM JH1BBT JH1GNU JR1LYT JR1EYB JR1FNR JR1BSM
1977	2 位/JA	1,733,864	1,862	323	JH1BBT CLUB
1978	8 位/JA	544,453	891	217	JH1GNU JH1SBE JR1AOQ JR1FNR JE1BME JE1QMV JR1FNR JF1ASB JF1DMQ JF1EAL JF1EPK JF1ODO JI1SHX JK1RJU JA0VSH
1979	7 位/JA	1,221,778	1,645	257	JH1BBT JH1GNU JR1IJV JE1QMV JE1SCJ JF1ASB JF1EAL JF1ODO JF1SDH JG1XLZ JI1MYH JI1SHX JK1RJU JL1PNH JH3MNT JA0VSH
1980	6 位/JA	1,074,502	1,304	289	JA0VSH JF1EAL JK1FLU JK1RJU JH1GNU JK1CQG JI1QPU JE1SCJ JF1SDH JJ1ETB
1982	7 位/JA	1,383,084	1,590	309	JE1QMV JF1EAL JK1CQG JK1DLQ JK1FLU JL1GPO JL1NNC JP1AIE JH4UTP JE6CEK JE6HIC JH0HNI

【表 6】CQ WW DX コンテストの参加記録（CW）　（参加カテゴリーは全て MM）

年度	順位	得点	局数	マルチ	オペレータ
1975	2 位/JA	672,055	980	257	JA1UKS JH1AGH JH1BBT JH1GNU JH1SBE JR1EYB JR1IMM JH1GNV JR1IJV JR1LYT JH1MDJ JA1QER
1976	4 位/JA	449,568	757	223	16_OPERATORS
1977	4 位/JA	2,237,760	2,137	370	JA1MRM JH1AGH JH1BBT JH1BNC JH1BTV JH1GNU JH1KLA JR1AOQ JR1IJV
1978	14 位/JA	190,005	443	159	JE1QMV JF1EAL JF1EPK JF1ODO JH1GNU JR1AOQ JR1FNR JA0VSH
1979	8 位/JA	486,746	900	194	JH1GNU JE1QMV JE1SCJ JF1EAL JF1QDO JF1SDH JI1SHX JK1DLQ JK1RJU JA0VSH
1980	5 位/JA	1,606,080	1,784	320	JA0VSH JF1EAL JK1FLU JK1RJU JK1CQG JH6UUN JF1SDH
1981	11 位/JA	696,960	1,121	220	JF1EAL JK1CQG JK1FLU JH6UUN JA0VSH JH0HNI
1982	7 位/JA	1,177,740	1,553	270	JF1EAL JG1XLZ JF1CUJ JI1MYH JK1CQG JK1DLQ JK1FLU JK1RJU JL1PGO JP1AIE JF3HBS JH4UTP JE6CEK JE6HIC JA0VSH JH0HNI JH0VJZ

写真 5　オペレーション風景 1
奥が JR1AOQ 手前は JH1BBT。1977 年 CQ WW DX SSB か？（JA7KCL 提供）

写真 6　オペレーション風景 2
手前から JR1EYB、JR1BSM、JR1LYT（窓の外）（JR1EYB 提供）

オール自作固体化リグでの 160m バンド CQ WW CW コンテスト参戦

最先端 Power MOS を使ったハイパワー送信機

確か 1975 年に、縦型パワーMOSFET が日立から発表・発売され、河村先生にご相談したところ連絡を付けて頂き、サンプルを入手した。高崎工場に受け取りに行ったと記憶している。同級生の上野君がオーディオ・アンプを作って、オーディオメーカに先んじて同年の理工展に出品した。キレの良い音を響かせていた。この時私（山村）は、当時珍しいダブル・バランスド・ミキサーDBM（R&K 社 M9）を使って高性能短波受信機を作り、同級生の西和彦氏（当時アスキー社創生期）からテレタイプ端末 M-15 を借りて、新華社通信などを受信して印字する展示をした。

JH1YDT でもパワーMOSFET を RF パワーアンプで使い始め、JH1GNU と JE1QMV（土井）を中心にピュアコンプリメンタリー・プッシュプル回路だけを使った MOPA 発振器を作り（1.9MHz、10W、VXO、2SK213、2SJ76、TO-220）、JK1RJU（川名）を中心に 100W 出力パワーアンプ（2SK134、2SJ49、TO-3。同じくピュアコンプリメンタリー・プッシュプル）などを作った。このアンプについては、W1FB から QST に記事を載せたい旨 CQ 出版に手紙が届き、原稿を送ったが、W1FB が SK となり、返事は来なかった。

2SK259H が発売されると、500W パワーアンプ PA を作った（3 パラ・プッシュ回路）。1.9MHz で 570W 出て（電源電圧 110V）、電源 160V では実験的に 1050W を得た。ダミーロードに使ったホーロー抵抗のガラスが溶けた。入力は数 W で足りたので、MOPA＋PA の簡単な構成で 500W 送信ができた。実験データは、拙著「トロイダルコア活用百科」に収録した。

超 High インターセプトポイント受信機

高くて大きなアンテナを使って強い信号が受かると、受信機の弱さに悩まされた。混変調、相互変調で信号が歪み、対策に減衰器を付けると DX からの弱い信号がノイズに埋もれた。広いダイナミック

レンジが欲しかった。ドレイクの受信機 R-4B/C が一番良かったが、万全ではなかったので、1.9MHz の受信機を作った。最強のダイオードを使ったダブル・バランスド・ミキサーを使い（MCL 社 SRA-1H）、局発に 50mW を与え（+17dBm）、雑音指数 NF20 dB〜30dB に設計して、相互変調歪 IP+30dBm 超の超高性能を実現した。IF 段もフォワード AGC トランジスタ 2SK1855 を使って歪を防いた。こうして受信の悩みを解決した。（特性を拙著に収録）

以上のオール自作ソリッドステート・リグで、1982 年の 160mWWCW コンテストに参戦した。日本で 3 位を得た（表 7）。送信、受信とも良好に行えた、YDT の総合力の結実を感じた、と運用した JH1BBT（牧大）の談であった。

（JF1DMQ）

シングルオペレータでエントリー

JH1BBT が実家の「アンテナ終い」を行う直前に 6mWAC を完成させたお祝いに、1981 年 12 月に JF1EAL（井村）JK1CQG（野口）が JH1BBT のマンションに来てくれました。午後三時ごろから呑み始め、終電が無くなりごろ寝して、翌朝帰ってもらうということがありました。この時に翌年 1 月の 160mCQ WW CW を YDT でやりませんかと、誘ってくれたと記憶しています。1980 年 12 月に彼等 2 人は ARRL160m に参加した実績（【表 3】）があったので、このような話になったと私は思います。寒い部室に 2 晩泊まり込みサポートをしてくれました。【表 7】に結果を示します。

（JH1BBT）

【表 7】1982 年 CQ WW 160m コンテスト結果（CW）

参加カテゴリー	順位（JA）	コール	得点	QSO	マルチ	オペレータ
Single OP High Power	1	JA7NI	7,992	145	18	
	2	JA5DQH	6,690	153	15	
	3	JH1YDT	3,804	96	12	JH1BBT

そして EME コンテスト

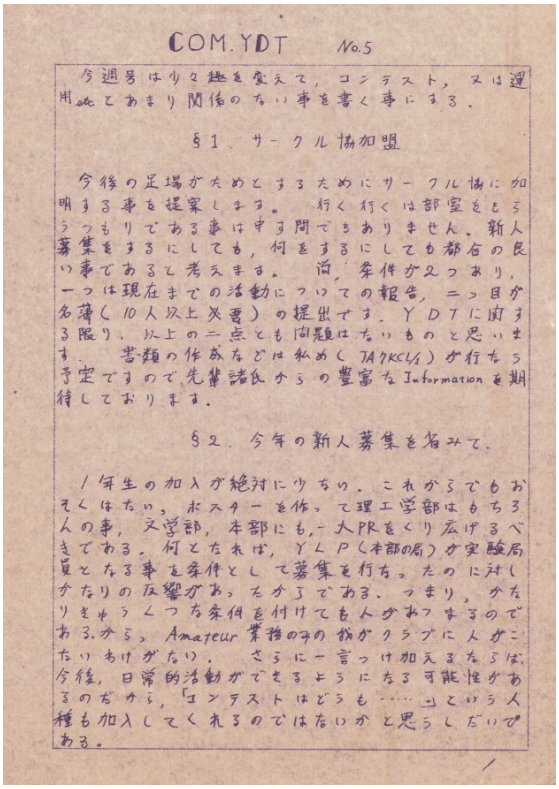
1976 年に、430MHz 帯で、月面反射 EME コンテストの受信を試みた。当時は、1975 年に W6LET がスタンフォード大学の巨大パラボラアンテナ（直径 45m）で運用した大ニュースがあり、JAMSAT の富士山での疑似衛星実験（後にアマチュア通信衛星 AO-8 号トランスポンダの製作）などがあって、触発された（1977 年に JA6DR が日本初の EME QSO 成功）。アンテナには、JA1JHF 設計の 430MHz の 22 エレ・ループ八木を 4 本（後に 8 本）製作した。機械工学科の加工室にお願いして、アルミ板からシャーリング機で細い短冊を 200 本ほど切り出してもらい、丸めたループを 22 個ずつ 4m のアルミ角パイプに取り付けて、製作した。HF に変換するクリコンを JA1TUR、JH1BRY の回路で作った。アンテナ直下の 3SK48 のプリアンプを、JA9BOH に教えを受けて製作した。一式を中庭に設置した。

当日の EME コンテストでは（1976 年晩夏）、日本の月の出の時刻（夕刻）に待ち構えた。月が JA-W 日米間、太平洋上に来る時刻である。ところが、東に低く雲があって、時刻を過ぎても月が見えない。月があるはずの方角でアンテナの方向を探るが、何も聞こえない。しばらくして月が見えたので、角パイプの穴を通して月が見える様に合わせると、聞こえた！！　W6……レポート交換している。歓声が沸いた。何局も聞こえた。数分して月が進むと信号が弱まり、信号が強くなるようアンテナの方向を調節すると、今度は角パイプを通して月が見えた。この両方法で月を追いかけた。アンテナは非常にシャープだった。方向は人力で、数人がかりで調節した。数時間にわたって受信ができた。月からの信号は弱いが、まるで HF 帯のコンテストのように聞こえて大興奮した、と JH1GNU 談。

昼間には、アンテナに近寄る先生方から「これは何ですか？」と訊かれて「太陽を観測しています。はっきり識別できます」と答えたのを覚えている。アンテナを太陽に向けると白色雑音が 3〜5dB 増える性能を得ていた（サンノイズ性能）。怪訝な眼差しの通行人（学生）は多数いた。

その後も数ヶ月に渡り数回、受信に成功した。

（JF1DMQ）



COM.YDT No.5

今週号は少々趣を変えて，コンテスト，又は運用etc.とあまり関係のない事を書く事にする．

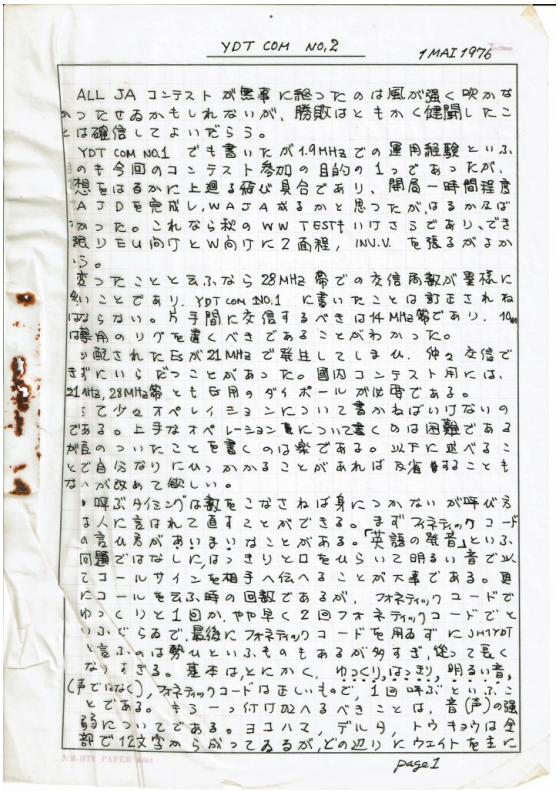
§1．サークル協加盟

今後の足場がためとするためにサークル協に加盟する事を提案します。　行く行くは部室をもらうつもりである事は申す間でもありません。新人募集をするにしても，何をするにしても都合の良い事であると考えます。　尚，条件が又つあり，一つは現在までの活動についての報告，二つ目が名簿（10人以上必要）の提出です．YDTに関する限り，以上の二点とも問題はないものと思います．　書類の作成などは私めく7AKCL/1）が行なう予定ですので先輩諸氏からの豊富なInformationを期待しております．

§2．今年の新人募集を省みて．

1年生の加入が絶対に少ない．これからでもおそくはない，ポスターを作って理工学部はもちろん人の事，又学部，本部にも，一大PRをくり広げるべきである．何となれば，YLP（本部の局）が実験局員となる事を条件として募集を行なったのに対しかなりの反響があったからである．つまり，かなりきゅうくつな条件を付けても人がわつまるのである．から，Amateur業務のためがクラブに人がこないわけがない．　さらに一言つけ加えるならば，今後，日常的活動ができるようになる可能性があるのだから，「コンテストはどうも……」という人種も加入してくれるのではないかと思うしだいである．

第 5 号の 1 ページ目（全 2 ページ）
表記は「COM.YDT」と COM が先であり安定しない。
この頃から部室の獲得を目指していたことが分かる。新人募集については今も悩ましい問題。
記事中にある YLP とは、当時早稲田キャンパスにあった無線局 JE1YLP のこと。



YDT COM NO.2　1 MAI 1976

ALL JA コンテストが思事に終ったのは風が強く吹かなかったせるかもしれないが、勝敗はともかく健闘したことは確信してよいでしょう。

YDT COM NO.1 でも書いたが 1.9MHz での運用経験というのも今回のコンテスト参加の目的の1つであったが、想をはるかに上廻る結果収穫であり、開局一時間程度 AJD を完成し、WAJA かるかと思ったが、はるかなばかりであった。これなら秋の WW TEST はいけさうであり、できれば E u 向けと W 向けに2面相，INV.V. を張るがよかろう。

変ったことと云ふなら 28MHz 帯での交信回数が異様に多いことであり．YDT COM NO.1 に書いたことは訂正されねばならない。片手間に交信するべきは 14MHz 帯であり．10m は専用のリグを書くべきであることがわかった。

心配された Es が 21MHz で発生してしまい．仲々交信できずにいらだったことがあった。国内コンテスト用には，21MHz，28MHz 帯とも専用のダイポールが必要である。

さて少々オペレイションについて書かねばいけないのである。上手なオペレーションについて書くのは困難であるが良のついたことを書くのは楽である。以下に述べることを自分なりにわかることがあれば反省することもなへが改めて欲しい。

呼ぶタイミングは敷をこなさねば身につかないが呼び方は人に言はれて直すことができる。まずフォネティックコードの言い方があいまいなことがある。「英語の発音」といふ問題ではなしに，はっきりと口をひらいて明るい音で以てコールサインを相手へ伝へることが大事である。更にコールを云ふ時の回数であるが，フォネティックコードでゆっくりと1回か，やや早く2回フォネティックコードでといふならば，最終にフォネティックコードを用ゐずに JH1YDT と言ふのは勿れといふものもあるが多すぎ，逆って良くなりすぎる。基本は，とにかく，ゆっくり，はっきり，明るい音，（声ではなく），フォネティックコードは正しいもので，1回呼ぶといふことである。きまった行切加へるべきことは，音（声）の強弱についてである。ヨコハマ，デルタ，トウキョウは全部で12文字からなっているが，どの辺りにウエイトを置

page I

第 2 号の 1 ページ目（全 2 ページ）
誌名が「YDT 通信」から「YDT COM」に切り替わった。（実は、第 1 号 3 ページ目も上部に「YDT COM」の記載がある。）
ところどころにフランス語がみられる。

Editor’s Comment

JH1GNU 小林さんにお取りまとめいただき、OB 7 名の共著という非常に豪華な記事を掲載することができました。
1970 年代の熱気を感じることのできる記事（たち）でした。
言及されていた YDT.com ですが、この Yesterday Develops Tomorrow も、そのある種の後継と言えるのではないかな、と思います。
“先祖”に敬意を表して、小林さんから頂いた YDT.com のバックナンバーをいくつかピックアップして掲載しました。
インターネット以前の「.com」はどういった意味だったのか、communication とかでしょうか。

2005 年頃の JH1YDT

7M4MON

写真 1　当時の QSL カード

2005 年頃の JH1YDT は「早大理工素人無線会」と称し、理工学部の公認サークルとして活動していました。顧問（会長）は 鈴木克巳先生で、私は幹事長を務めていました。部誌に寄稿する機会をいただきましたので当時の活動を振り返ってみました。

年間行事

4 月上旬　新歓

他のサークルに混じって大久保キャンパス（現・西早稲田キャンパス）でビラ配りを行っていました。大学のサークルらしく、新歓では居酒屋でワイワイやっていた気もします。

入部者は毎年 0〜2 名程度で、当時から常に存亡の危機にありました。

4 月下旬　ALL JA コンテスト

51 号館屋上にルーフタワーとアンテナを毎回設営して参加していました。

アンテナはクリエートデザインのバンザイダイポール（730V）で 7〜50MHz まで運用。防水シートを傷つけないように設営するのが大変でした。

写真 2　アンテナ設営の様子

オペレータは私も含め 2〜3 名で、あまり熱心ではなかったような……。YDT では入賞したことはなかったと思います。どちらかというと夜景を楽しんだりお酒を飲んだりするほうがメインでした。

写真 3　コンテスト参加の様子

10 月中旬　全市全郡コンテスト

全市全郡コンテストは、バンザイダイポールに 144/430 の GP を追加し、さらに屋上機械室の上の 1200MHz の GP（常設）も含めて参加していました。季節的に台風が直撃した年もあり、運用中にルーフタワーが倒れて危険な状態になったこともありました。

屋上へ上がる際には、51 号館の「技術企画総務課」に鍵を取りに行くのですが、何度も行っていると、ほぼ顔パスになっていました。

OB がコンテストで入構する場合は、事前に名簿を 51 号館の統合事務所に提出する必要があり、メーリングリスト上で参加者をとりまとめるのも幹事長の役割でした。

写真 4　コンテスト参加時の機材

11 月上旬　理工展

補助金がもらえると聞いて理工展に参加したこともありました。SSTV で画像を伝送するデモをしたような気がします。拘束時間が長い割に自由度も参加者も少ないので、私が現役のときは 2 回ほど出展しただけでした。

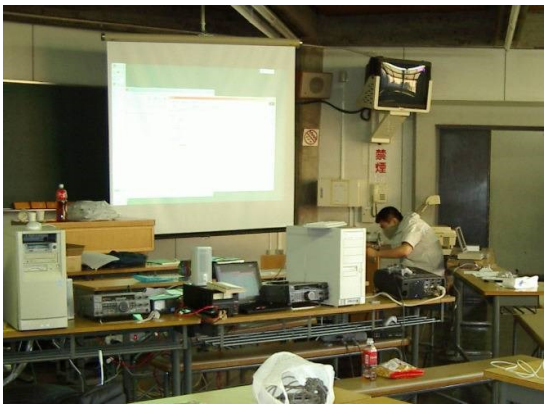


写真 5　理工展の様子

3 月中旬　追いコン、次年度準備

年度末には卒業生の追いコンをしていました。その他、「マイルストーン」という大学情報誌にサークル情報の掲載を依頼したり、公認サークルの継続手続きをしていました。公認サークルとして部室を維持するには、一定数以上の部員が必要だったはずで、例年、綱渡りの状況だったように記憶しています。

その他の活動

51 号館屋上はロケーションが抜群なので、個人コールで 6m AND DOWN（C144 部門）に参加したこともありました。機械室の上の 1200MHz の GP を 144/430 の GP に交換し、丸一日 CW を Run していました。

写真 6　機械室上の GP アンテナ

結果は関東 3 位。交信局数は 1 位とそれほど変わらなかったのですが、マルチが全然足りず、ほぼダブルスコアで負けてしまいました。勝つには八木が必要ですね……。

部室について

当時は公認サークルでしたので、戸山キャンパスの学生会館 E1103 号室に部室がありました。学生会館屋上にはクランクアップタワーと HF の八木アンテナが設置してあり、同軸ケーブルが部室まで引いてありました。残念ながら、アンテナは廃部に伴って 2012 年に撤去されてしまったようです。入室には学生証ではなく専用のカードが必要でした。

また、夜 22 時以降は使用不可で、泊まりでのコンテスト運用はできませんでした。

部室はテレビやゲーム機や漫画など暇つぶしグッズが充実していて、授業が 2 コマ以上空くときはポストのチェックをしがてら遊びに行っていました。

写真 7　部室の様子

ただ、学生会館は大久保キャンパスから徒歩 15 分くらいかかり、さらに坂を下ったところにあって無線的にはロケーションが悪いので、運用はほとんどしなかったと思います。

ちなみに、学生会館の早稲田学生文化賞銘板プレートに私の名前があったりします。

部員について

無線サークルに入部する人は、無線以外で似たような趣味を持っていることが多く、個人的な繋がりで遊びに行くことは多かったように思います。

バイク

なぜかアマチュア無線家はバイクに乗りたがるらしく、私も在学中に VTZ250 というバイクに乗っていました。無線の話よりバイクの話の方が盛り上がっていたような気がします。

クリスマスにサンタのコスプレをして都内を周るオフ会に参加したり、北軽井沢の OB の別荘にツーリングに行ったこともありました。

写真 8　北軽井沢ツーリング

PC

YDT はパソコンに造詣が深いメンバーが多く、当時は自作 PC ブームだったこともあってよく秋葉原に行っていました。ジャンク PC をニコイチしたりジャンクノートを修理したりと 3R を意識したエコロジーな取り組みをしていました。（単にお金がなかっただけ……）。部室の PC は ABIT BP6 という、界隈では有名なマニアックなマザーボード使っていました。

アニメ・ゲーム

当時は To Heart、White Album や Air、Kanon 等のノベル系ゲームが大ブームで、新作ゲームを貸し借りしていました。

アニメは、涼宮ハルヒ、らき☆すた、初代プリキュアあたりの年で、声優は釘宮理恵さんや能登麻美子さんなんかが人気がありました。あぁ、懐かしい……。

他のサークルとの掛け持ち

他のサークルと掛け持っていた人も多く、私もマイクを握るよりは、コントラクトブリッジでトランプを握っていたほうが長かったかもしれません。

活動休止

私の卒業後も後輩が頑張って続けてくれましたが、2008 年以降は新入部員も途絶え、残念ながら 2012 年に廃部となってしましました。

2012 年 4 月 30 日に有志で片付けを行い、最後の晩餐を大久保キャンパス前のビッグボーイで行

いました。このとき私が預かった無線設備は、新生YDT に引き継がれることになります。

終わりに

2016 年に JH1DWQ という偉大なる新星が現れ「早稲田大学無線通信研究会」として JH1YDT が生まれかわり、私が在籍していたとき以上に活発に活動されていること、とても嬉しく思います。

2018 年には 6m AND DOWN コンテスト@赤城山にお邪魔させていただき、自分が大学時代に数え切れないほど打っていた JH1YDT/1 を“コール”したときは、なんとも言えぬ感動がありました。

サークル活動に際し、私にできることがありましたら何でもおっしゃってくださいね。今後も末永く活動が続けられることをお祈りしています。

Editor’s Comment

2000 年代も、“2000 年代感”あふれる記事で、なんとも面白く羨ましく思いながら編集していました。
廃部に至る経緯と最後の片づけの話も初めて知った話で、設立、廃止、再始動とバランスのよい記録になったな、と編集長は喜んでいます。
そして、顔を隠しているのが笑い男。写真を頂いたとき、にやにやが止まりませんでした。

なんだかんだ人は集まる

JH1DWQ 染谷拓海

「4 万人も学生が居るんだから、無線部を作ればなんだかんだ人は集まるだろう。」

入学した早稲田に無線部がなかった私は、軽い気持ちで JH1YDT を復活させた。

恐らく諸先輩方はご承知のことと思うが、「なんだかんだ人は集まる」というのは極めて楽観的な考えであり、事実復活後の YDT においても 2 年間「2 人時代」が続いた。そもそも復活に向け活動を開始してから 3 ヶ月ほどは「独り」であり、このまま誰も集まらないのではないかと不安で仕方がなかった。夏季休暇直前くらいだったろうか、JR2KHB 氏から入会希望のメールを受け取った際の高揚感は今も鮮明に覚えている。

2 人時代の活動は主に 4 つ。

①JARL 東京都支部のイベント手伝い
②食堂での CW 練習会
③他大学でのコンテスト参加
④理工展出展

どれも思い出深いものだが、特に印象深いのは理工展である。復活 2 年目の 2017 年より参加を開始した。特に初回は 2 人しか居ないのに、企画は 5 つあるという無謀な出展……。圧倒的人員不足の中、他の活動で知り合った JARL 東京都支部のメンバー、他大学の無線家に駆けつけていただき、なんとか 2 日間を終えることができたのである。幅広く活動していた意義を実感した瞬間であった。

「なんだかんだ人は集まる」という楽観的な考えで復活させた YDT。蓋を開けてみれば、私の所属した 5 年間のうち、4 年間は JR2KHB 氏との「2 人時代」ないしは JJ1OTK 氏を加えた「3 人時代」であった。サークルとしての規模は非常に小さかったが、学外との交流をメインに、他大無線部に負けない活動をしていたと思う。その活動の中で出会った人脈を考えれば、「なんだかんだ人は集まる」という考えもあながち間違っていなかったのではないだろうか。

現在の YDT はメンバーも増え、ボランティアセンタ支援サークルにもなり、部誌も発行するなどより一層活動が盛り上がっていると感じている。人との出会いはより多くなっているだろう。集まった人との出会いを大切に、自由に、楽しく、JH1YDT としての活動を堪能してほしい。一人の OB として陰ながら応援している。

Editor’s Comment

現在も YDT に度々ご助力をいただいている JH1DWQ 染谷さん。
実は、私は学年がずれているので一緒に在籍したことはないのですが、YDT で群馬に移動運用しに行った際などにお世話になっています。
染谷さんが「なんだかんだ人は集まる」と YDT を復活させなかったならば、私も LVQ 氏も入会せず、この会誌もなかったわけなので、感謝しても感謝しきれません。
なんだかんだ人は集まり、YDT も会員数 2 桁を数えるまでになりましたが、公認化（21 名）への道がまだまだ遠そうなのは私の努力不足と感じています。

著者紹介

記事の掲載順で記載

JK1PNV　園部帆理

文化構想学部文化構想学科多元文化論系 3 年
JH1YDT 幹事長。本誌の編集長。中学のときに入った部活が無線だったことでアマチュア無線の道に足を踏み入れる。
もっぱら大学への申請や会の事務を行い、総務省関係は代表にお任せしています。大ボリュームの会誌の編集と就活がダブルパンチでダメージ大きめ。

JK1IXS

中央大学法学部 3 年
インカレ生。中央大学電気工学研究部（JA1YGX）も兼サー。というか YGX がメイン（のはず。こんな私も受け入れてくれる YDT は本当に懐が深い）。生まれつきの文系人間で電波工学は全然わからない。個人局でもコンテストを中心に QRV。

JI1TMD はべけん

先進理工学部生命医科学科 4 年
JH1YDT の免許上の代表。昨年まで幹事長でした。詳しい経歴を記事にしたのでよろしければ。今年に入って研究活動が忙しすぎて、アマチュア無線のアクティビティは低下気味。毎日大腸菌を愛でる生活。

つつつ

先進理工学部 4 年
電気が全般的に好きだったが、その中でも一番電波に魅力があると思い無線に触れ始めた。自分で無線機を作ってみたいと思い勉強＆試行錯誤中。

JK1QZX

教育学部理学科 2 年
一総通に挑戦中。通信術が倒せない。

むねた

基幹理工学部 2 年
大学に入りサークルに入ってから無線を始めた。誘拐された時にモールス信号を出せるようになるためスタート。専攻内容と近しいため、積極的に勉強中（してない）。

カリ

基幹理工学部 2 年
YDT に学部 1 年の秋から所属。メインの活動はダンスなのだが名古屋の団体なので交通費に半分ぐらいお金を持っていかれる。また、電信がかっこいいと思うことはや 5 年。未だ何も手をつけられていないので今年こそはと密かに思っている。

JK1QYA

基幹理工学研究科修士 1 年

JK1LVQ

2023 年 3 月に YDT を仮引退した元インカレ生。これまでの部誌の編集長を務め、部員たちから数多の記事を巻き上げた。趣味は短歌、写真、本作りなど。それらを活かし、アマチュアながら広報物制作や撮影を担当してきた。今年度限りで YDT からはすっぱり足を洗おうと考えているが果たして。現在求職中。

MAQ

法学研究科（2022 年度修了）
大学院より早稲田に在学。学部時代は、学内において非常通信に関する団体の立ち上げを行った。YDT でも非常通信プロジェクトの立ち上げに参画した。卒業後も通信関係の職種に従事。

JA6JFO/JE1JNJ　右近博雄

理工学部電気工学科（1972 年度卒）
JH1YDT 創生メンバー。福岡市の生まれ育ち。大学入学と前後して JA6JFO と JE1JNJ を開局。
卒業後は電線メーカーに入社し、自社製同軸コードを現在でも愛用しています。
60 歳代後半に初めてタワーを揚げました。今日も小さなビームアンテナを振り回しながらアマチュア無線三昧で余生を楽しんでいます。
タモリ（森田一義）さんとは高校（アマチュア無線部）＆大学とダブル先輩後輩に当たります。

JA1PRF　榎本和雄

理工学部電気工学科（1973 年度卒）
無線のきっかけ。小学校の時のゲルマニウムラジオで電池がなくても放送が聞こえることに感動。その後、ジャンク真空管で中波ワイヤレスマイク製作、電波を発信する面白さを実感。HAM のスタートとなる。その後、10 数年経過。HAM ならだれでも望む高所のアンテナ、入学時 51 号館の屋上を眺めては、通信できる日を切望していました。
卒後はゼネコンに入り、ここでも、5〜6 人の学部は違えど早大卒の無線メンバーと会社の無線部創設にかかわりました。今は、リタイアし、近隣の子供相手のヨットクラブの運営に携わる傍ら、長らく休んでいた無線（マンションから QRP 通信）を楽しもうと計画しております。

Taka exJA1UKS

理工学部電気工学科（1972 年度卒）
中学生の頃は昔よくいた「ラジオ少年」でした。高校一年生の時に免許を取得、リグを自作してはじめました。大学生になり SSB トランシーバを自作し、ビームアンテナを建て海外との交信主体で活動していました。就職と共に無線活動は徐々に低下、無線局免許も失効してしまいました。

JH1BBT　牧大公一

理工学部電気工学科（1975 年度卒）
自作の 2elevated loop radial GP で 160/80/40*/30*/20/15*/10m に QRV 中（*印は loop でない）

JH1GNU　小林秀

理工学研究科卒電気工学専攻（1977 年度修了）
CW オンリーで QRV 中。QRP で HF8 バンドにて DXCC を達成。

JH1SBE　古川幹雄

理工学研究科金属工学専攻（1978 年度修了）
都内住宅密集地で HF ハイパワー局運用中。40m WAZ（CW）、8 バンド DXCC 達成。

JR1EYB　秋葉治

理工学研究科資源及び金属工学専攻（1979 年度修了）
1976 年度早稲田大学素人無線同好会会長。1970 年に東京都板橋区で開局。1972 年頃より海外との QSO を始める。YDT に入ってから、多くの刺激を受ける。就職後、勤務地の関係で静岡県に QSY。1990 年、静岡県の自宅にタワーも建設。1995 年、5B DXCC（#3,959）、2002 年 Honer Roll を ARRL DXCC Desk から頂く。2003 年、勤務地変更で横浜市に QSY。会社を卒業後、20 年間の QRT を経て、2023 年にタワーを建設し再開。

JF1DMQ　山村英穂

理工学研究科電子通信工学専攻（1980 年度修了）、2011 年博士（工学）（阪大）
430MHz で月面反射 QSO、新バンド長波 136kHz QSO、記事執筆多数。著書：『トロイダルコア活用百科』（初版 1983 年、定本 2003 年、改訂新版定本 2006 年、改訂新版第 10 刷 2022 年）

JA7KCL　武田布千雄（旧姓菅野）

理工学研究科物理学及び応用物理学専攻（1979 年度修了）
1994 年福島県福島市に U ターン。

JA0VSH　丸山和秀

理工学研究科建設工学専攻（1982 年度修了）
早稲田大学素人無線会 1979 年度部長。現在は出身地の長野県飯田市に戻り、小さな無線小屋を建てて QRV 中。現在 160mDXCC175 エンティティー。

7M4MON

中学生の時に従事者免許を取得し、JA1YFA でアマチュア無線の面白さに目覚めました。JH1YDT 卒業後は某無線通信機器メーカーで設計開発業務に従事しています。

JH1DWQ　染谷拓海

先進理工学部電気・情報生命工学科（2020 年度卒）
2011 年 JH1DWQ 開局。2016 年 JH1YDT 再開局。卒業後も群馬県より CW を中心に QRV。

会誌編集時の速報として、第 53 回 6m AND DOWN コンテストの PMA 部門で優勝というニュースが入ってきました。せっかくなので、歴史を残すという意味でここに記しておきます。

あとがき

JK1PNV　園部帆理

この人数の著者がいる雑誌の編集を担当するのは初めてで、大変も大変、皆様にはご迷惑をお掛けしました。総編集時間は 2200 分、まるまる一日を超えていました。
次号は、後輩が編集長をやってくれると思いますので、お楽しみにお待ちください……。

JK1IXS

趣味について、何を書いてもいいよーと言われたのですが、結局アマチュア無線の記事になってしまいました。正直、大学入学時はこんなこと（もちろんいい意味で）になるとは思っていませんでしたが、こうして YDT のみなさんに出会えただけでも良い趣味を持ったなと感じております。また、本誌でお会いすることはあるでしょうか？　それでは……。

JI1TMD はべけん

記事にできるようなものが無くて、最終手段として自分の身の上話を書いてしまいました。次号に向けてネタを作りたいです。

JK1QZX

もともと、テーマ記事にはあのような無気力な記事を書くつもりはなく、また、自由部門には「PC-9801 向けフロッピーエミュレータの作成」なる記事を寄稿するつもりであった。しかし、進捗が遅れたため、記事の内容を変更した。

むねた

何を書けばいいのかで悩む点が多くあったが、自分の書きたいことをそのままかけたので面白かった。テーマとあっていなかったら申し訳ない……。

カリ

無線にあんまり関係ないけどこんな内容でいいのかなと思いつつも執筆しました。こういう文章を書くことがないので、あまりうまくまとまらず自己満足的な内容になってしまったので来年はもう少しマシに書けるようになんとかしたいところです。

JK1LVQ

ついに新体制の部誌が発行されましたね。私が編集長として最初の部誌を完成させた時は「これも一代限りかな」なんて考えましたが、PNV くんが編集長を引き受けてくれたことがとても嬉しかったです。編集長じゃないと部誌制作がこんなに楽だなんて知りませんでした。ありがとう。
昨年度末に「仮引退」という形で YDT の一線を退きましたが、今年度末にはいよいよ本当の引退です。モラトリアムを終わらせるのは正直嫌だけど、社会に決められた卒業や就職というタイミングではなく、自らが決めたタイミングで幕を引くということに何か意味があるのではないかとも思います。今回書いた部誌の作り方についての記事は置き土産のつもりです。君たちがまた部誌を作りたくなったらいつでもできるように。YDT で、大学で、たくさん遊んでください。それでは。

JR1EYB　秋葉治

今回の記事をまとめながら古い写真を発掘し、当時を懐かしく思い出していました。また、YDT の創設メンバーの一人だった右近 OM と出会い、アイボールまで楽しんでしまいました。

編集後記

歴史を残す、と言うのが今回の会誌の私なりのテーマでした。
当会は 2012 年に一度廃部となり、2016 年に復活した経緯があります。加えて、正直なところ大学無線サークルはどこも新入部員の確保に苦労しており、当会がまたいつ活動休止になってもおかしくない、という危機感があります（幸いにして、現在は 10 名以上会員がいますが）。
そのため、後の後輩たちがサークルの歴史を知ろうとしたときに簡単に知ることができるよう、歴史が散逸しないようにここにまとめた次第です。
この記録が、いつか誰かの助けになればいいな、と思っています。

JK1PNV　園部帆理

編纂　JH1YDT　早稲田大学無線通信研究会
編集長　JK1PNV　園部帆理
編集協力　JK1LVQ（前編集長）
表紙デザイン　JK1LVQ
表紙協力　アンテナ博士

入会を希望される方へ

早稲田大学無線通信研究会に入会したい、一度話を聞いてみたいという方は、下記ホームページや Twitter、メールなどへお気軽にご連絡ください。
お待ちしています！

◂公式ホームページ
https://jh1ydt.com/

◂公式 X（旧 Twitter）
https://twitter.com/jh1ydt/

◂公式ブログ
https://jh1ydt.hatenablog.jp/

- 活動の最新情報は各種サイトからご覧ください。
- 部誌の内容についてのご指摘、ご質問などがございましたら、jh1ydt.waseda@gmail.com までお寄せください。
- 掲載内容は執筆当時のものです。ご了承ください。

JH1YDT 会誌　Yesterday Develops Tomorrow
第 1 号　2022/11/5　第 69 回理工展にて頒布
第 2 号　2023/4/1　2023 年度新歓にて頒布

これまでの会誌は、JH1YDT のウェブサイト上でご覧いただけます。

Yesterday Develops Tomorrow 第 3 号

2023 年 11 月 4 日　初版　第 1 刷発行　第 70 回理工展にて頒布

発行者　早稲田大学無線通信研究会　JH1YDT
東京都新宿区
代表 JI1TMD　幹事長 JK1PNV
jh1ydt.waseda@gmail.com
https://jh1ydt.com/

印刷所　ちょ古っ都製本工房
京都府京都市

CQ CQ CQ...
DE JH1YDT...